

42343

教科書文庫

4

8/0

42-1937

200030

2415

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

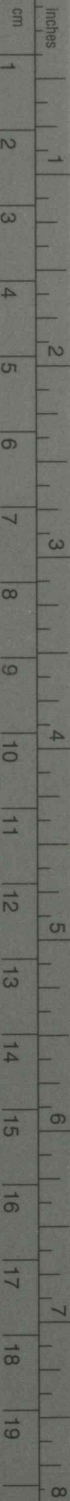


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Me9  
資料室

女子國文選

〔新制版〕

卷七



資料室

日八十月二十年二十和昭  
濟定檢省部文  
用科語國校學女等高

# 女子國文選

新制  
版

版藏院書治明

275.9  
Me 9

は し が き

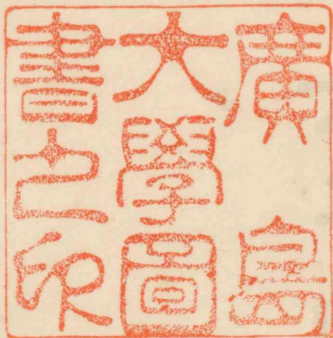
一 教材は、現代の趨勢に鑑み我が國體の精華國民精神の發揚に意を致し、質實穩健・高雅なる性情の涵養を旨とし、特に文の醇正雅健なるものを選択して、全卷を首尾一貫、系統あり連絡あらしめたり。

一 材料の選擇は、國語教授の目的に副ふべく、成るべく各種の文體に習熟せしめんことを期し、現代の秀作を始め、各時代に互りてその傑作を網羅せるは勿論、なほ各種の有益なる知識的教材をも適當に採録して、詞藻を豊かならしめたり。

一 文字・假名遣の用法はいふまでもなく、送假名も全卷を通じて讀み易きを主とし、世間の慣用に從つて統一あらしめんことを期したり。

一 漢字は必ずしも正字に拘泥せず、寧ろ通用に從ひたれども、一面、正俗字辨別の要あるにも鑑み、これを一表として初級用の各卷末に附し、漢字に對する正確なる知識を得しめんことに注意したり。

一 特に上級用にありては、我が國文學の變遷の大綱を知らしめんことを期し、附するに文學年表を以てし、彼此對照せしめて、これが發達の徑路を觀察せしむるに便ならしめたり。



目次

一 將來の日本國民……………田中 寬一……………

二 黒潮の賦……………鶴見 祐輔……………三

三 九十の春光……………大町 桂月……………三

四 晩春の別離……………島崎 藤村……………三

五 俳人芭蕉……………荻原井泉水……………三

六 奥の細道……………松尾 芭蕉……………三

七 七寶の柱……………泉 鏡 花……………三

八 平安京……………藤岡作太郎……………三

九 世界の借家大將……………井原 西鶴……………三

一〇 禪珍内供……………(宇治拾遺物語)……………七

一一 徒然草抄……………(徒 然 草)……………七

一二 物のあはれ……………本間 久雄……………三

一三 流泉啄木……………(今昔物語)……………九

一四 うたかた……………(方丈記)……………九

一五 爲朝の弓勢……………(保元物語)……………三

一六 公卿僉議……………(平治物語)……………四

一七 おどろのした……………(増鏡)……………三

一八 高嶺の櫻…………………………三

一九 論孟抄…………………………三

二〇 學の話……………得能 文……………三

二一 秋の力……………網島 梁川……………三

二二 宗教の生活と感化……………姉崎 正治……………三

附録 文學年表…………………………三

田中寛一  
文學博士。岡山  
縣の人。東京文  
理科大學教授。

將來の日本國民の  
大使命を自覺  
せよ

物質的と云ふ動

各人の心は統一あり  
かあるが故か否か  
未だ自覚下がいかに  
しやんかからんは  
くはあうね

### 一 將來の日本國民

田中寛一

日本國民の前途は洋々として希望に満ちてゐる。しかも、この希望を實現するには、國民各員の思慮と努力とを要する。それは日本國民の大使命を自覺し、その達成に向かつて精進することによつてのみ實現し得られる。

文明の進歩は諸國民間の交通を頻繁にし、個々人の相接する機会を多くするのみならず、印刷物などによる思想の傳播を容易ならしめる。その結果は、各國民とも、新しい習慣思想信仰文藝に接觸する機会が多くなつて、在來の道德や思想などが威力を弱め、人々の行動がまち／＼になりがちである。これは現代の諸國民が親しく經驗してゐるところであり、各國の指導者がその

頭を悩ましてゐる問題である。思想の混亂・不統一も或場合には進歩の階梯とも見られるが、それが極端に走つて、一國民の傳統を破壊し去る時には、その國民は自滅の外はなくなる。吾々が外國の文明に接觸する時に、最も心しなければならぬのはこの點である。即ち傳統的な中心思想なり、中心感情なりを失はないで、外來の思想なり、感情なりは、總べてわが傳統的なものに磨きをかけて、それを精練する材料とするといふ心掛が必要である。凡そ如何なる事でも、新しいから善いとはいはれない。これに反して、自國の歴史は尊い。蓋し、その國の歴史は、その國民に適する思想の發現の跡であるからである。同様に、風俗・習慣・道德・宗教等も、亦その國民に適するものの傳承せられたものである。この明かな事實を無視して、徒に新を追うて外國の眞似をするのは、

田中寛一  
文學博士  
岡山縣人  
東京文理科大學教授

各人の心は統一あり  
かあるが故か否か  
未だ自覚下がいかに  
しやんかからんは  
くはあうね

澤庵亡國論

澤庵亡國論の考へによれば、澤庵の如き滋養分のない、消化の悪い物を食べ

てゐれば、國が亡びるといふのであつた。然るに、最近の研究では、

澤庵には、<sup>ビタミンB</sup>が多量に含まれてゐるから、益多く食べ

るがよいといふことになつたのである。前の論者も、徒に西洋か

ぶれをしなないで、澤庵を長い間食べて來た日本人が、強健に壽命

を保つて來たことを考へたならば、あのやうな論は吐かれな

つたであらう。西洋崇拝家の議論には、凡そこの類のものが多

い。たゞ吾々の反省しなければならぬことは、風俗や習慣などの

中には、その起る時には相當の理由があつても、時代の経過につ

れて、その理由は疾くに消滅して、形式ばかりが存續することが

あるといふ事實である。かゝる場合には、適當にこれを改良する

必要がある。併し、どんなに些細な習慣でも、それを改變する時に

は、その結果としてどんな影響があるかを先づ考へなければな

らない。況や、國民の中心思想に影響を及ぼす如き思想の研究者

は、極めて慎重な態度を執らなければならない。

從來、日本人が一途に外國人の行動を模倣することのみ努

めて來たのには、凡そ二つの理由がある。その一つは、西洋諸國と

の交通の開けた當時からの情性であり、他の一つは、わが國の文

化に就いての深い研究が無かつたからである。西洋文明の特徴

は、主として自然科学の研究とその應用とにあつて、目前に容易

に示されるものであるが、これは、從來わが國に最も缺けてゐた

點であつた。それ故に、西洋文明に始めて接觸した吾々の先輩は、

わが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

大正の頃、澤庵の亡國論を唱へた人がある。その考へによれば、澤庵の如き滋養分のない、消化の悪い物を食べ

てゐれば、國が亡びるといふのであつた。然るに、最近の研究では、

澤庵には、<sup>ビタミンB</sup>が多量に含まれてゐるから、益多く食べ

るがよいといふことになつたのである。前の論者も、徒に西洋か

ぶれをしなないで、澤庵を長い間食べて來た日本人が、強健に壽命

を保つて來たことを考へたならば、あのやうな論は吐かれな

つたであらう。西洋崇拝家の議論には、凡そこの類のものが多

い。たゞ吾々の反省しなければならぬことは、風俗や習慣などの

中には、その起る時には相當の理由があつても、時代の経過につ

れて、その理由は疾くに消滅して、形式ばかりが存續することが

あるといふ事實である。かゝる場合には、適當にこれを改良する

必要がある。併し、どんなに些細な習慣でも、それを改變する時に

は、その結果としてどんな影響があるかを先づ考へなければな

らない。況や、國民の中心思想に影響を及ぼす如き思想の研究者

は、極めて慎重な態度を執らなければならない。

從來、日本人が一途に外國人の行動を模倣することのみ努

めて來たのには、凡そ二つの理由がある。その一つは、西洋諸國と

の交通の開けた當時からの情性であり、他の一つは、わが國の文

化に就いての深い研究が無かつたからである。西洋文明の特徴

は、主として自然科学の研究とその應用とにあつて、目前に容易

に示されるものであるが、これは、從來わが國に最も缺けてゐた

點であつた。それ故に、西洋文明に始めて接觸した吾々の先輩は、

わが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。こ

れは無理のないことである。しかも、その後、自然科学の研究は、その進歩に於て殆ど停止するところがなく、一步、否數十歩も遅れてゐたわが國民は、たゞ彼等の跡に追隨して行くだけであつた。これが西洋崇拜の主なる原因で、その結果は、一も二もなく總べて彼等の行動はよいものと考へ、それを摸倣することが一日遅るれば、それだけ時世に遅れるやうな感を抱き、茲に摸倣に對する競争といふ珍現象を惹き起したのである。

その當然の結果として、わが國の文化に特有なものが有るか否かをさへ顧みるものが少くなり、誰も彼も自己を反省する邊を失つたのである。随つてわが國の文化の精髓の如何といふことに就いては、まだ多くの人々はこれを知らなかつた。それは、一つは自然科学の研究に較べると、著しく困難なことであつたに

もよるが、また一部の人々を除いては、これを研究しようとする心さへも起さなかつたからである。さうして、何時の間にか傳統的の中心思想をさへ失はうとしてゐたのである。併し、今や西洋文明の本質もほゞ明かになり、また心ある人々は内に自ら省みて、わが國民特有の文化に就いてこれを明かにしようとするやうになつた。將來は、一方には西洋文化もこれを研究しつゝ、しかもそれに捕はれず、他方にはわが固有の文化に就いて一層深く探究し、その美點と缺點とを明かにし、東西兩文明の融合の上立つ創造に向かつて、大いに努力しなければならない。日本國民の大使命を果さうとするには、この努力を惜しんではならない。抑、西洋文明は物質的の文明であるといはれるが、それは一般的のいひ現し方である。彼にあつても、吾々の大いに學ばなければ

ばならない多くの精神的訓練がある。殊に日常生活に於ける對人的道德、或は公衆的道德に於て、吾々の師とすべきものが少くない。對人的道德の中でも、殊に信用を重んずること、時間を守ること、汽車や電車内に於ける作法等に於て、わが國民は遺憾ながら英國人などに劣つてゐるやうに思はれる。併し、これは、わが國民が先天的に不正直であり、他人の迷惑を考へない國民であるのではない。或は廣い範圍の社會生活にまだ慣れないためでもあらうが、苟も最高文明の建設に参加する者としては、此等の點に於ても、亦優れてゐなければならぬ。

更に注意すべき重要なことは、科學の研究とその應用とに就いてである。吾々は精神文化を高調するけれども、それと同時に、科學の研究とその應用との重要なことを、大いに認めるもの

である。元來、わが國には、外國に無いやうな尊い文化があるのであるが、それだけでは優越國民になれない。その上に、科學的知識を利用して、生活の改善と能率の増進とを十分に計らなければ、到底今後の世界の大舞臺に立つて、優秀な他國民と伍して行くことは出来ない。殊にわが國の如くに、天産物に於て餘り恵まれてゐない國では、生産の人的要素たる科學的知識の應用を、一層進めなければならぬ。この點に就いては、わが國に於ても、近來著しい進歩を見るに至つたが、まだ十分とはいはれないのである。將來の大文明を荷ふためには、わが國民の大いに努力しなければならぬことが、數へ切れぬほど多くあるであらうが、要は現實に即しつゝ、高遠の理想を目ざして何處までも進むべきである。(「日本民族の將來」による)



鶴見祐輔  
評論家。東京の  
人。

二 黒潮の賦

鶴見祐輔

眼がさめると、大空は底の抜けたやうな快晴だ。船は黒潮を渡つてゐるらしい。

誰か日本で「黒潮の賦」といふものを歌つてくれる天才は出ないものか。この黒潮は日本のものだ。世界で一番大きい存在は太平洋だ。その太平洋の中を腹一杯にのたくり廻つてゐるのが、この豪快な黒潮なのだ。それは世界一の快男子なのだ。

② 少し黝味を帯びた、一寸澁味のある顔をして、うんと丹田に力を入れ、南の海からきつと正面を見詰めたまゝ、一散に走り出して、北氷洋の氷山のある眞只中へ、他所眼も振らず躍り込んでゆくところは、どう考へても雄大で剛膽だ。男ならかうもありたい

と思ふ男らしさが、この世界一の快男子黒潮の風貌だ。どんな深いところでも、またどんなに暴風雨が荒れ狂つてゐても、びくともせず、しかもたつた一人で邁進して行くのだから痛快だ。これだけのものを、三千年間眼の前に眺めながら、これを一曲快心の長歌に賦して、日本國民の雄心を鼓舞するだけの天才が、未だに出て來なかつたことはいかにも残念だ。

甲板に出て見ると、四望漫々たる大洋の眞ん中で、水光天に接し、爽快忍ぶことができない。海の好きな私は、水の上に浮かんでゐるとき常に幸福である。どうか日本國民が海に浮かぶことを熱愛する習慣を作つて貰ひたいものだ、いつも思ふ。

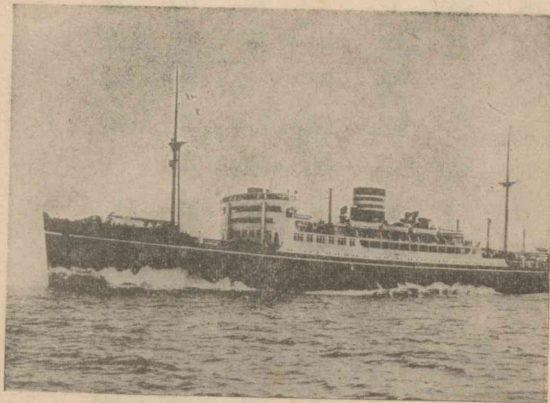
さういふ意味からいつて、私は日本國民が船を造る術に長ぜんことを日夜祈願する一人だ。英國の詩人キヤムベルが、英國は

キヤムベル  
英國の詩人。一  
七七七—一八四  
四年

黒潮の賦  
快男子  
擬人法  
黒潮  
暖流  
黒潮  
を歌つて  
人。  
評論家。東京の  
人。

砲臺を要せず。海は英國の砲臺なり」と謳つたやうに、日本を守るものは、この漫々たる太平洋なのだ。だから我々は、國民悉くこの海の上に浮かんで、これを我が家とするの氣象を養ひたいものだと思ふ。

この點からいふと、この私の乗つてゐる氷川丸は、大いに人意を強うするに足りる。これは全部日本で出來た郵船會社の新造船で、しかも今度が處女航海なのである。しかもこの船を造つたのが中學の同窓の鴨井君である。だから、益奇縁



氷川丸

鴨井君  
名は仁喜太。

或日の午後、同君の案内で船内を隈なく見て歩いた。細かい説明を聞きながら、これだけの船を日本が造るやうになつたかと、國民的矜誇の情を覺えた。維新から指折り數へて僅に七十幾年で、日本の科學は、もうこれだけの進歩をしたのだ。世界の新しい文明の基礎を爲す科學と機械とを、これだけの短い日子のうちに使ひこなした我々日本國民の天分に對する誇りが、今更のやうに感じられる。

この時、鴨井君が面白い話をされた。それは長い間私の考へてゐた問題に、一つの明るい暗示を投げたものであつた。その私の考へてゐたといふのは、西洋と東洋との文明が、將來如何なるところに落着くのであらうかといふことである。つまり古典的な

文化をそのまゝの姿で持つてゐる東洋と、新しい機械文明を最も尖銳に發達させつゝある西洋、殊に亞米利加とが、文化的に文明的に接觸してゐるのが即ち今日の日本である。故に日本の中には、東洋文化の精髓と西洋文明の本質とが、二つの潮流として泡立ち流れてゐるのだ。東洋文化の本質は、手工業を以て基礎とした古代人が作り上げたものであつた。故に根本の精神は、品物を作るにも、思想を作るにも、一つづつに他の物と違ふ個性があり、その個性の本質は、美しきもの、善きものを作らうといふ氣持であつた。故に古典的文明の本質は藝術的であつた。善に對する精進と美に對する憧憬とが、一貫して表現されてゐるのが古典文化の特色だ。これに對して、近代二三百年間に、歐洲で機械が發明され、科學が發達した結果、人間の必要品が、いと早く、いと大量

に生産されるやうになつた。その結果、美しいものを作らうといふことよりも、早く安く澤山に作らうといふ心持が濃厚となつて、藝術的な、且質を本旨とした古典文明から、能率本位の、且量を中心とする近代機械文明が起つて來た。その功罪は別論として、兎に角二つの文化の間に、その動機に於て、その表現の形式に於て、根本的な相違のあるのは争はれないことである。その二つが、今の日本に雜然と不統一に存在してゐるのだ。二つの流は、大きい川が合流するやうに、どつと一處に流れ落ちたまゝ、まだほんたうに一河を爲さないうで、波打ち泡立つて流れてゐる。近代文明は一切の人々の生活を容易にした。併しながら、人間の人生に對する態度を低級にした。古代文明は美しき善きものを造り出した。しかしそれは、要するに暇のあつた、即ち生活に累はされな

つた少數貴族の所産であつて、一般大衆の生活は、これがために  
樂にはならなかつた。即ち多數の人類の苦役といふ犠牲の上に  
建設された少數人の文化であつた。この二つが如何やうに調和  
をしてゆくのかといふことが、今の日本の有つてゐる大きな問  
題である。

鴨井君は語る。

この頃造船術の進歩の結果、我々日本の造船家の考へ出した  
ことは、西洋の技術のまゝに船を造るといふことだけでは、どう  
も不満足だといふことである。それではどうしたら宜いかと考  
へたあげく、最近にやり出したことは、先づ美しい船の繪を描い  
て、その繪のやうな船を造るといふことであつた。かういふ方法  
で、先づ見て美しいものを造船技術と無關係に描いて見て、然る

西洋  
能率 本質景的  
東洋  
藝術的 倫理的

鴨井君  
明子暗示

自分かいつても  
つたおとつこの向物  
古典的  
近代の  
てつてつて

後に、これを技術に適ふやうに造船したのである。ところが、その  
結果、我々の發見したことは、見て美しい船が一番技術上よい船  
であるといふことであつた。即ち美といふものが科學の窮極で  
あるといふことを發見したのであつたと。

この簡単な話は、私の長い間の疑問に對する明るい解答であ  
つた。古典文明のうちにあつた美の精神、善の精神といふものが、  
機械文明の中にある能率の精神、大量生産の精神と合致すべき  
日が、今近づいてゐるのだ。

その仕事をなし遂げるのが二十世紀の日本民族の仕事なの  
だ。否、もうその仕事はかうして造船界では始つてゐるのだ。

(歐米大陸遊記)

女子國文選(新制) 卷七

三 九十の春光

大町 桂月

大町桂月  
名は芳衛。文學者。高知縣の人。大正十四年歿、年五十七。

秋の風は泣くなり。冬の風は怒るなり。春の風は笑ふなり。

春の風の吹くところ、そこに淡雪消えて若菜萌え、谷川の氷解けて波の花まづ咲く。枯木活きて芽を吐き、燒痕蘇りて蕨の柔拳空を擱まんとす。二十四番の風吹きつくして、梅咲き、桃咲き、櫻咲き、九十の春光到るところ、駘蕩として春の海の如く、人は花に送られ花に迎へられて、心自ら長閑なり。

春は命なり、萬物みな活きて動く。春は愛なり、天地共に笑ふ。少女を人生の春とすれば、春は天地の少女なり。

二

櫻は美しき

梅や、桃や、梨や、李や、果實あるが故に、牆籬の中に鎖さるゝも、櫻は幸ひに食はるべき果實を持たず、野に山に、到るところ春を飾る。これ櫻ならでは得べからず、また日本ならでは求むべからず。我が日本を櫻花國とは、いひ得て切なるかな。

櫻は多きをよしとす。一目千本、滿山みな櫻、朝陽と相映發す。何等の美觀ぞや。されど、人跡絶えたる山奥、清水ちよろゝと流るるあたり、よしや、事を解せざる詩人は、紅葉と共に夜の錦にならずふとも、その梢とも見えざりし一本の櫻の花に現るゝもまた興なからずや。

散るを惜しむは櫻を愛する所以にあらざるべし。一陣の春風に、千片また萬片、惜しげもなく枝を辭して、空に香雪を漲らし、地に錦繡を布く。一二片雨に和して、醉顔を打つも、また悪しからず。

夜の錦  
「見る人もなく  
て散りぬる奥山  
の紅葉は夜の錦  
なりけり」(紀貫  
之)  
その梢とも  
「み山木のその  
梢とも見えざり  
し櫻は花にあら  
はれにけり」(源  
頼政)

櫻は散るさまこそ最も愛すべけれ。

黄昏一犁の雨、入相の鐘を傳へて、十里の長堤、春漸く老いんとす。知らず、江上の漁翁網し得たる白魚と落花といづれか多き。

三

臘月夜に酔を買うて歸る。習々たる東風、面を吹いて寒からず。

林下の一路、白模糊として、一脈の清香骨に徹す。嗚呼、月の影、梅の香、古人をして「若くものなし」と詠せしめしも、かゝる夜なりけん。

梅に取るべきは、その香、奇古なるその幹花の色は白きを尙ぶ。紅きは俗なり。一園内に行儀正しく列植するは、折角の梅花を俗了す。竹外籬畔、臥龍の影を清淺の水に横たへ、黄昏一片の月を添へて、暗香四野に浮動す。これ既に林和靖にいひつくされたれど、梅花この境を得て始めて始めて奇を現し、この境梅花を得て始めて俗

暗香

「暗香浮動月黄昏。」(林和靖の詩句)

梅の特色  
若くものなし  
「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の臘月夜にし」  
くものぞなき  
「大江千里」  
香を以て見

去る時  
去る時  
去る時

氣を脱す。

四

菜花一路、胡蝶、人と相追ふ。春風の行方それと知られて、柳の絲靡くともなく動くところ、水車ゆるく旋り、桔槔音なくして、小犬籬根に眠る。遙かなる桃林の上に塔尖の出づるは伽藍あるにや、詣でて歸るとおぼしき村娘の一群、相和して歌ふ聲、漸く遠く、漸く細く、遂に霞の中に消えゆく。

五

春日麗かにして、梅花一庭に薫ず。小猫縁に蹲り、少女二人追羽子をつく。風死して、空に唸りし紙鳶みな地に落ち、一鳶ひとり高く盤旋す。

六

林和靖  
名は通。支那宋代の詩人。

去る時  
去る時  
去る時

去る時  
去る時  
去る時

見渡す限り、菜花の黄、麥浪の青きに連なり、遠山霞みて低し。陽炎燃ゆる野の空高く、美音嚶唳、天樂を聞く心地し。天使人間に近づきて、天の祕密を語るかと疑はる。諦視するに、その處を知らずかくて、日西に沈まんとす。一羽の雲雀、その聲を載せ來りて、麥生に落つ。淡月一痕、家路に歸る農夫の擔げる鍬にかゝれり。

七

春の花の大觀は、櫻と梅とに盡きたれど、春信まづ福壽草に宿るも可憐ならずや。桃紅李白、世に俗なりといひ古されたれど、場處によりては趣あり。椿の花ぼつりんと水に落ちて波輪を起すも、閑適の趣なしとせず。菖蒲公英の優しき、木蓮の氣高き、見もて行けば限りあるべしとも覺えず。山吹牡丹芍藥、菖蒲藤、滴る如き新緑、これ人間の春に洩れたれど、天地の春を粧はずんばあらず。

八

春を飾るものは、第一に花なり。天地美裝す。第二に鶯歸雁雲雀なり。自然の音樂をなす。第三に暖氣なり。寒からず、熱せず、心自ら草木と共に弛ぶ。第四に霞なり。日光これに當りて、景致柔らぎ、月影これに映じて、夜色更に幽なり。

九

春雨また春の一觀たらずんばあらず。裴著てくだす、篠師に、霞むあしたの雨を知る」とは、千蔭の歌に入りしところなり。降るとも見えぬ雨に、黄塵收り俗客去りて、天地自らしめやかなり。閑窓の下、靜かに碁に對して、一層の幽寂を感ず。

十

佐保姫春を司り、立田姫秋を司る。請ふ、余をしてこの二様の神

裴著て  
「隅田川裴きて  
くだす篠師にか  
すむあしたの雨  
をこそ知れ」加  
藤千蔭

千蔭  
加藤千蔭。國學  
者。江戸の人。  
文化五年歿、年  
七十四。

を相對比して想像せしめよ。佐保姫は優婉なり。曲眉豐頰、二重瞼の目元愛くるしく、丸顔にして白く肥りたるにあらざるか。立田姫は清淑なり。鼻高く、口元凜々しく、眼涼しく、顔少し長く、體稍瘦せたるにあらざるか。佐保姫は溫和なり。春の初風の暖きが如し。立田姫は爽快なり。秋の初風の心地よきが如し。立田姫は嚴肅なり。怒りて浙瀝の聲をなす。佐保姫は寛厚なり。靄然として微笑む。松蟲・鈴蟲はこれ立田姫の歌へるなり。鶯はこれ佐保姫の歌へるなり。櫻は佐保姫の衣なり。紅葉は立田姫の衣なり。霜白く、月清し。これ立田姫の姿なり。霞匂ひ、花香る。これ佐保姫の姿なり。佐保姫は情篤き淑女なり。立田姫は意志強き烈女なり。しめやかなる春雨は、佐保姫の慈悲を現し、樹草におく秋霜は、立田姫の威嚴を現す。われは立田姫を敬し、佐保姫を愛す。(桂月全集)

島崎藤村  
名は春樹。詩人。  
長野縣の人。

四 晩春の別離

島崎藤村

時は暮れゆく春よりぞ、  
恨みは友の別れより、

また短きはなかるらん。  
さらに長きはなかるらん。

君を送りて花近き

高樓までも來て見れば、

緑に迷ふ鶯は

霞空しく鳴きかへり、

白き光は佐保姫の

春の車駕を照らすかな。

これより君はゆく雲と

ともに都を立ちいでて、

おもへば琵琶の湖の

岸の光に迷ふとき、

東膽吹の山高く、

西には比叡・比良の峰、



法皇  
白河法皇を申す。  
山城  
京都府。  
畿内  
山城・大和・河内・和泉・攝津の五箇國の總稱。  
伊賀・伊勢  
共に三重縣。

日は行きかよふ山々の  
いかに勝れし想ひをか、

深きながめをふし仰ぎ、  
沈める波に湛ふらん。

流は空し法皇の

夢はるかなる鴨の水、

水にうつろふ山城の

みやびの都行く春の

霞める姿見盡くして、

畿内に迫る伊賀・伊勢の

鈴鹿の山の波遠く

海に落つるを望む時、

いかによろづの恨みをば、

空行く鷺に窮むらん。

春去りゆかば、青によし

奈良の都に尋ね入り、

としつき君が戀ひしたふ

御堂のうちに遊ぶ時、

古き藝術の花の香の

伽藍の壁に遣りなば、

いかに韻を身にしめて、

深き思ひに沈むらん。

さては秋津の島が根の

南のつばさ紀の國を

めぐりて進む黒潮の、

鳴門に落ちてゆくところ、

天際とほく白き日の

光をもらす雲裂けて、

目に遙かなる遠海の

波のをどるを望む時、

いかに胸打つ音高く

君が血汐の騒ぐらん。

または名に負ふ歌枕

波に千とせの色映る

明石の浦の朝ぼらけ、

松萬代の音にひびく

舞子の濱の夕まぐれ、

もしそれ海の雲落ちて、

淡路の島の影暗く、

狭霧のうちに鳴きかよふ

紀の國  
紀伊國のこと。  
和歌山縣。

かしんふに自然  
かちあち

千鳥の聲をきく時は、  
遠き古を偲ぶらん。

いかに浦邊にさすらひて、

げに君がため山々は

雲を停めん、浦々は

磯に流るゝ白波を

揚げんとすらん。よしさらば、

旅路遙かに野邊行かば

野邊のひめぐと、森行かば

森のひめぐと探りもて、

高きに登り、あめつちの

もなかに遊び、大川の

流をきはめ、山々の

神をもよばひ、谷々の

鬼をもおこし、歌人の

魂をも遠く返しつゝ、

清しき聲を打揚げて、

朽ちせぬ琴をかき鳴らせ。

さらば名残は盡きずとも、

袂をわかつ夕まぐれ、

見よ、影深き欄干に、

煙をふくむ藤の花、

北行く雁は大空の

霞に沈み鳴きかへり、

彩なす雲も愁へつゝ、

君を送るに似たりけり。

非心

あゝ何時かまた相逢うて、

もとの契りをあたゝめん。

梅も櫻も散りはてて、

すでに柳は深みどり、

人はあかねど、行く春を

いつまでこゝに留むべき。

われに惜しむな、家苞の

一枝の筆の花の色香を。

(藤村詩集)

萩原井泉水  
名は藤吉。俳人。  
東京の人。  
芭蕉  
俳人。伊賀國の  
人。俳諧正風の  
祖。元祿七年歿、  
年五十一。

### 五 俳人芭蕉

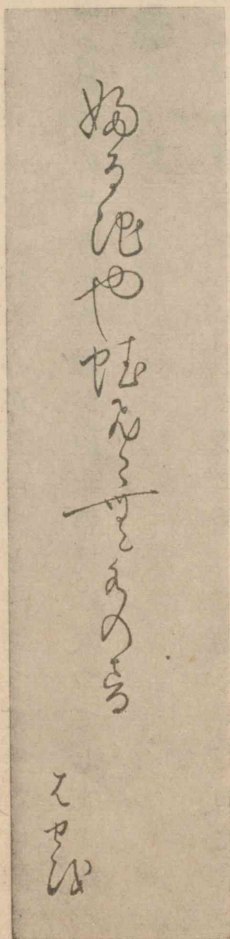
萩原井泉水

或日、芭蕉は窓に肱を掛けて、物を思ふでも無く、輝かしい春の吐息に耳を傾けてゐた。江戸の門人達は、花を見るために暇を消してゐるのか、又は師の著述の邪魔をしまいとしてか、訪ふ者が稀であることも、結局彼の心を寂しいまでに靜かに澄ませたのであつた。

庭の池は、荒れるまゝになつてゐた。それは魚の生簀として用ひてゐた頃は、手入もとゞいてゐたのであらうが、大火から後は、全く棄てて顧みられず、藻が浮いたり、蛙が棲んだりするの任せきつてあつた。彼はこの毎日見慣れてゐる溜池に、格別の風趣がある譯では無いが、有るがまゝに物寂びた感じには、飽きぬも

のがあると思つた。凡て人が作つた物は、如何に佳く出来てゐても、堅苦しい意力や智力が露出してゐるやうで、面白くないものだが、その物が廢れ、人の手から離れて、「時」といふものの手に渡されてしまふと、「時」はそれをすつかり美化してしまふ。人は荒れる

ふる池や蛙飛こ  
む水の音  
はせを



芭蕉筆蹟

とか毀れるとかいつて、それを惜しむけれども、實はそれが新しかつた時、整つてゐた時よりも、遙かに本質的に美しくなつて來るのだ。築き上げたばかりの城よりも、草の茫々とした廢墟の方が、ずつと美しいやうなものだ。それは人の手に虐げられてゐた

大井林町二丁目

有限  
人間の短い生命  
悠久の時  
無限

物質が、自然のまゝに歸るところから來るのかも知れぬ。人間の短い生命を越えて流れてゐる悠久な時間といふものの厳しさに、觸れるためかも知れぬ。兎も角、庭先に荒れたまゝに棄てられてある古い溜池の、物寂びた水面を見つめてゐると、恐ろしく幽邃な感じに誘はれる。心が、ぢいつと澄切つて、そこに漣もない水面その物のやうに、意識が靜止の境に凝つてしまつたやうである。

その時、澄みきつた心の鏡に閃いて動く一つの生命があつて、靜止した水面に音を立てて、一匹の蛙が飛込んだのであつた。大地の中から目覺めて來た春の魂が、この輕快な生き物となつて、死のやうな靜寂を蘇らせたのであつた。悠久の相に浸りきつてゐた芭蕉の心は、忽ち刹那の象に引き戻された。而してその刹那

自然の悠久さ  
刹那のやうな  
春の魂の  
微

動  
大自然の生命  
に籠る

の相を通して、再び悠久の眞實をしつかりと感得することが出來た。蛙飛込む水の音と、その時芭蕉の口に上つたのはこの短章であつた。——蛙飛込む水の音。——この音を、彼は彼の心を以てしつかりと聞いた。この音を通して、彼は大自然を象徴する幽玄のしたゝりを聞いたのである。この時、口に上つた短章を補足して、彼は一句を得た。

古池や蛙飛込む水の音

この句を、彼は自分ながら幾度となく吟じ返した。それは推敲の量を重ねて出來たものでは無く、實に無雜作に口をついて出來たもので、不用意の獨りよがり落ちてをりはしまいかとも反省してみたが、この平凡な、有りふれた些細な現象の中に籠つてゐる自然の味ひと、その味ひを無雜作に巧まらずに率直に表現

した言葉の味ひとに、自分としては棄て難い、否、自分としては始めて探り得た新しい味ひ、それこそほんたうの俳諧の味ひといふべきものがあるといふ自信さへ得たのであつた。彼は又この句を鍵として、新しい世界の扉を開いたやうに思つた。今までは外部から平面的に見つぶして、つまらぬ只事と観じてゐたところのものが、その内部から、その生命に感ずることに依つて、生き生きとした呼吸を以て蘇つて來る、この不思議な生命の祕密こそ、自然藝術の幽玄なる境地に求めらるべきものであると、彼は思つた。彼は今にして始めて自然藝術、否、詩歌の道の歸趣をはつきりと見極め得たと信じた。この道を以て俳諧の新しい世界は開拓せらるべきものだと確信した。(旅人芭蕉)



松  
寺

よけ  
ふ旅

吳天に  
「去年の九月東  
洛に到り、今年  
の九月吳郷に來  
る。」(白樂天)  
草加  
埼玉縣北足立郡  
の町。

いかで都へ  
「たよりあらば  
いかで都につげ  
やらむ今日白河  
の關は越えぬ  
と」(平兼盛)  
三關  
奥羽三關。うや  
むやの關、風の  
關、白河の關。

六 奥の細道 松尾芭蕉

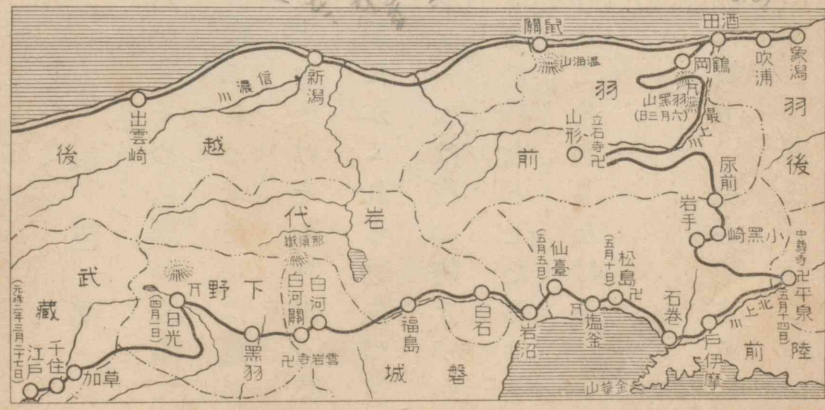
今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひ立ちて、  
吳天に白髮の恨みを重ぬといへども、耳にふれて未だ目に見ぬ  
境、若し生きて歸らばと、定めなき頼みの末をかけ、その日漸く草  
加といふ宿にたどり著きにけり。瘦骨の肩にかゝれる物、先づ苦  
しむ。たゞ身すがらにと出立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎゆか  
た。雨具墨筆のたぐひあるはさり難きはなむけなどしたるは、さ  
すがに打捨て難くて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

心許なき日數重なるまゝに、白河の關に掛りて、旅心定まりぬ。  
いかで都へと便り求めしも理なり。中にも、この關は三關の一に

秋風を耳に  
「都をば霞ととも  
に立ちしかど  
秋風ぞ吹く白河  
の關」(信能因)  
紅葉を佛に  
「もみちばのみ  
な紅に散りしけ  
ば名のみなりけ  
り白河の關」(大  
中臣親宗)  
古人冠を  
清輔の袋草子  
に「竹田大夫國  
行といふもの陸  
奥に下向の折  
白河の關を過ぎ  
て能因の歌を憶  
ひ、裝束を改め  
て敬意を表した  
と見えてゐる。」

清輔  
藤原清輔。歌人。  
正四位皇太后宮  
大進に到る。治  
承元年歿、年七  
十四。  
曾良  
俳人。名は河合  
惣五郎。信濃國  
の人。芭蕉の門  
人。寶永七年歿。

して、風騒の人心を留む。秋風を耳に残  
し、紅葉を佛にして、青葉の梢なほ哀な  
り。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひ  
て、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を  
正し、衣裝を改めしことなど、清輔の筆  
にも留め置かれしとぞ。  
卯の花をかざしに關の晴著か  
な  
曾良  
抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第  
一の好風にして、凡そ洞庭、西湖に恥ぢ  
ず、東南より海を入れて、江の中三里、浙

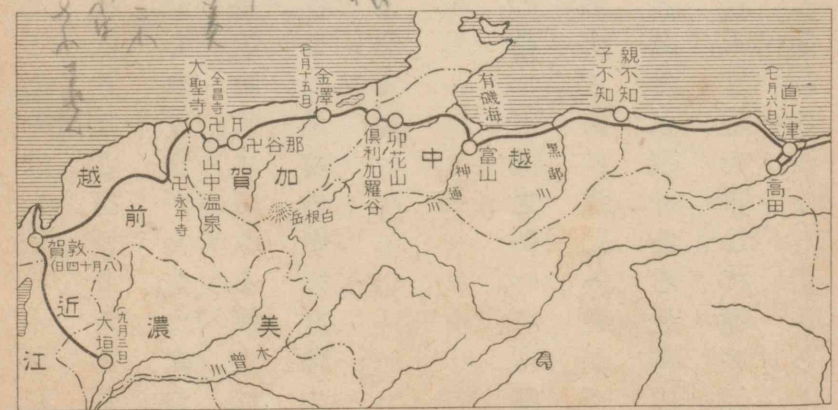


年六十。  
扶桑  
日本國の異名。  
洞庭  
支那湖南省にあ  
る大湖。  
西湖  
支那浙江省杭州  
府の西にある  
湖。  
浙江  
支那浙江省杭州  
府にある川。潮  
水の奔騰を以て  
名がある。

大山つみ  
大山祇神。山を  
司り給ふ。

雄島  
松島灣の一島。

江の潮を湛ふ。鳥々の數を盡くして、敬  
つものは天を指し、臥すものは波に匍  
匐ふ。或は二重に重なり、三重に疊みて、  
左に分れ、右に連なる。負へるあり、抱け  
るあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こ  
まやかに、枝葉潮風に吹き撓められて、  
屈曲おのづから矯めたるが如し。その  
氣色窅然として、美人の顔を粧ふ。ちは  
やぶる神の昔、大山つみのなせる業に  
や。造化の天工、いづれの人か筆を振ひ、  
詞を盡くさん。  
雄島が磯は、地つゞきて海に出でた



雲居禪師  
もと京都妙心寺  
の禪僧。伊達政  
宗に迎へられて  
松島瑞巖寺に居  
る。萬治二年寂  
年七十八。

平泉  
岩手縣西磐井郡  
の村。

姉葉の松  
宮城縣栗原郡澤  
邊村大字姉齒に  
あつた。

緒絶の橋  
同縣志田郡古川  
町にあつた。

石の巻  
同縣石巻市。

黄金花さく  
「すめらぎの御  
代榮えむとあづ  
まなるみちのく  
山に黄金花さ  
く」(大伴家持)

袖のわたり  
同縣桃生郡橋浦  
村か。

尾ぶちの牧  
石巻の東四軒に  
ある牧山か。

る島なり。雲居禪師の別室の跡、座禪石などあり。はた松の木蔭に、  
世を厭ふ人もまれく見え侍りて、落穂松笠など打煙りたる草  
の庵、閑かに住みなし、如何なる人とは知られずながら、先づなつ  
かしく、たち寄るほどに、月海に映りて、晝の眺めまた改る。江上に  
歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寝す  
るこそ、あやしきまで妙なること、ちはせらるれ。

十二日、平泉と心ざし、姉葉の松、緒絶の橋など聞き傳へて、人跡  
稀に、雉兔藪蕘の往きかふ道、そこともわかず、終に道踏みたがへ  
て、石の巻といふ港に出づ。黄金花さくと詠みて奉りたる金華山  
海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、竈の煙  
たち續きたり。思ひかけずかゝる處にも來れるかなと、宿からん

まの萱原  
同縣牡鹿郡稻井  
村眞野か。

長沼  
同縣登米郡新田  
村か。

戸伊摩  
同縣登米郡登米  
町。

三代  
藤原清衡・基衡・  
秀衡。まがはら  
一睡の中

一睡の中  
沈既濟が枕中記  
の中の邯鄲の夢  
の故事による。

南部  
盛岡市及びその  
附近の古稱。

衣川  
岩手縣膽澤郡の  
西境に發し、東  
流して北上川に  
注ぐ。

泉が城  
中尊寺の西北約  
一軒。

國破れて山河  
在り、城春にし  
て草木深し。  
(杜甫)

とすれど、更に宿かす人なし。漸うまどしき小家に一夜を明かし  
て、明くれば、また知らぬ道まよひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧ま  
のの萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿  
うて、戸伊摩といふ處に一宿して平泉に至る。その間、二十餘里ほ  
どとおぼゆ。  
三代の榮耀、一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀  
衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を残す。先づ高館に上れば、  
北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城をめぐりて、高館  
の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てて南部口  
をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に  
籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青み  
たり。と、笠打敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。



二堂 經堂と光堂。も  
と中尊寺内にあ  
つたもの。中尊  
寺は、清衡が修  
築したもので  
盛大であつた  
が、後に野火の  
ために焼けた。  
三將 前記三代と同  
じ。  
三尊 阿彌陀如來と左  
右の脇士。

夏草やつはものどもが夢の跡  
かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し、光堂  
は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて、珠の扉風  
に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽敗空虚の叢となるべきを、四  
面新たに圍みて、薨を覆ひて、風雨を凌ぎ、暫く千歳の記念とはな  
れり。

五月雨の降りのこしてや光堂

長島 三重縣桑名郡の  
村。

曾良は腹を病みて、伊勢の國長島といふ處にゆかりあれば、先  
立ちて行くに、

行き行きてたふれ臥すとも萩の原

曾良

と書き置きたり。行く者の悲み、残る者の恨み、隻鳧の別れて雲に

迷ふが如し。予もまた、

今日よりや書附消さん笠の露

大聖寺の城外、全昌寺といふ寺に泊る。なほ加賀の地なり。曾良  
も、前の夜この寺に泊りて、

夜もすがら秋風聞くや裏の山

と残す。一夜のへだて、千里に同じ。吾も秋風を聞きて衆寮に臥せ  
ば、曙の空近う讀經の聲澄むまゝに、鐘板鳴りて食堂に入る。今日  
は越前の國へと、心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども、紙硯を  
かゝへ、階のもとまで追ひ來る。折ふし庭中の柳散れば、  
庭掃いて出づるや寺に散る柳  
とりあへぬ様して、草鞋ながら書きすてつ。(奥の細道)

大聖寺 石川縣江沼郡の  
町。  
全昌寺 大聖寺町の町は  
づれにある禪  
寺。

泉鏡花

名は鏡太郎。文學者。金澤の人。中尊寺。岩手縣西磐井郡平泉村にある寺。

七七寶の柱

泉鏡花

山道二町ばかり、中尊寺はもう近い。

大きな廣い本堂に、一體見上げるやうな釋尊の外、寂寞として何も無い。それが莊嚴であつた。

日の光が幽かに漏れた。

裏門の方へ出ようとする傍に、寺の厨があつて、其處で巡覽券を出すのを、車夫が取次いてくれる。巡覽すべきは、始め藥師堂、次の寶物庫、さて金色堂、所謂光堂、續いて經藏、辨財天といふ順序である。皆、參詣の人を待つて始めて扉を開く。すぐ又あとを鎖すのであるが、寶物庫には番人がゐて、經藏には、年の若い出家が、火の氣もなしに一人經机に對つてゐた。

始め藥師堂に詣つて、それから寶物庫を一巡すると、こゝの番人のお小僧が鍵を手にして、一條、道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわゝに咲きつゝ、且芝生に散つて、敷いたやうであつた。

櫻は中尊寺の門内にも咲いてゐた。麓から上がらうとする阪の下の取りつきの處にも、一本見事なのがあつて、山中心得の條を記した禁札と一緒に、たしか「淺黄櫻」といふ札が建つてゐた。けれども、そのみには限らない。處々汽車の窓から視た櫻は、奥が暗くなるに従つて、ぱつと冴えを見せて咲いたのはなかつた。薄墨鬱金、またその淺黄といつたやうな、どの櫻も、皆ぼつとりとして曇つて、暗い紫を帯びてゐた。雲が黒かつたためかも知れない。と、階の前の花片が、折からの冷たい風に、ばら／＼と誘はれて、

さつと散つて、この光堂の中を空ざまに、ひらりと紫に舞ふかと思ふと、――羽目に浮彫りした孔雀の尾に玉を刻んで、緑青に錆びたのが、なほ嚴かに美しい。その翼をばらばらとたゞいて、――



光堂の内部

ちらくと床にこぼれかかる。と、宙で黄金の巻柱の光をうけて、ぱつと金色に翻るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を睜つた。床も、承塵も、柱も、固より

十二光佛  
阿彌陀佛をその  
光明の徳によつ  
て名づけた十二  
の佛相を現した  
もの。

二天  
帝釋天と梵天。  
六地藏  
地藏菩薩を六道  
に配した名。

身も、この雲は且踏んでも破れぬ。その雲を透して、四方に、七寶莊嚴の巻柱に對するのである。美しき虹をそのまま、柱にして畫がかれたる十二光佛の微妙なる種々相は、一つ一つ錦の絲に白露を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中に現れて、清く明らかに、而も幽かなる幻である。その十二光佛の周圍には、玉螺鈿を星の流るるが如く輝かして、寶相華勝曼華が透間もなく咲き廻つてゐる。この柱が須彌壇の四隅にある。まことに天上の柱である。須彌壇は四座あつて、壇上には彌陀觀音勢至の三尊、二天六地藏が安置され、壇の中には、眞中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、これに各、一口の劔を抱き、鎮守府將軍の印を帯び、錦袍に包まれた三つの屍が、まだそのまゝに横たはつてゐるさうである。

雛芥子の紅は、美人の屍より開いたと聞く。光堂は、こゝに三箇

七七寶の柱

の英雄が結んだ金色の果このみなのである、  
謹んで辭して、天界一叢の雲をおりた。

階をおりざまに見返ると、外圍ウチカの天井裏に蜘蛛の巣がかゝつて、風に軽く吹かれながらきらりと輝くのを、不思議なる塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。

さて經藏を見よ。また彌よびが上に懐かしい。

羽目には、天女迦陵頻伽カハラヒンカが髣髴うつつとして舞ひつゝ、奏うたてつゝ浮出てゐる。影をうけた束貫の材は、鈴と草の花の玉の螺鈿らでんである。

漆塗、金の八角の臺座には、本尊文殊師利、朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口を開けた、青い毛の分厚な横顔が視られるが、づゝつと足を舉げさうな構へである。右にこの轡を取つて一寸振向いて、菩薩にものをいひさうな

優闔王

橋賞彌國の王。

釋尊に歸依し

た。西紀前五世

紀の人。

善財童子

菩薩の名。

淨名居士

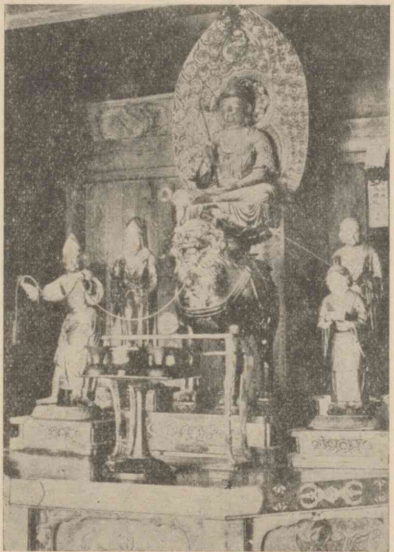
維摩詰。釋尊と

同時の人。

佛陀波利

龍樹の弟子。

のが優闔王、左に一匣を捧げたのは善財童子、この兩側左右の背後に、淨名居士と佛陀波利が、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを、肩にかつぐやうに杖ついて立つ。額も、目も、眉も、その



經堂の彌壇

いづれもにこゝとして、  
文殊も微笑んでまします。  
第一獅子が笑ふ、獅子が、

この須彌壇を左に、一架  
を高く設けて、こゝに紺紙おんし  
金泥こんじの一卷を、半ば開いて

捧げてある。見返しは、金泥、銀泥で本經の圖解を描く。——清麗巧  
緻にて、且神祕である。

今こゝに來てこの經を視ると、毛越寺の彼は、恰も砂金を捧ぐ

毛越寺  
平泉村にある  
寺。

るが如く、これは月光を仰ぐやうであつた。

架の裏に、色の青白い、瘦せた墨染の若い出家が一人ゐたのである。私の一禮に答へて、

「ごゆつくり、ご覽なさい。」

二三の散佚はあらうが、いふまでもなく堂の内壁に廻した八つの棚に満ちて、二代基衡のこの一切經、一代清衡の金銀泥一行まぜ書の一切經、並びに判官最原の第一人者、三代秀衡老雄の奉納した黄紙宋板の一切經が、みな黒耀の珠玉の如く漆の架に満ちてゐる。——一切經の全部量は、七駄片馬と稱するのである。

「……拜見をいたしました。」

「はい。」と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高足駄で、卷袖で、寒く細りと草を行く。清らかな僧であつた。

「辨天堂を案内しますで。」と車夫がいつた。

向うを墨染で一人行く若僧の姿が、寂しく、然も何となく尊く、正にまさしく彼處におはする……天女の御前へ我等を導く、つましく謙讓なる一個のお取次のやうに見えた。

經堂を出た。今は眞晝ながら、月光に酔ひ、桂の香に卷かれた心地がして、亂れたまゝの道芝を行くのが、青く清明なる圓い床を通るやうであつた。

階の下に立つて仰ぐと、典雅優麗なる辨財天の金字に縁して、牡丹花の額がかゝる。——

いかにや、年ふる雨露に彩色のかすかに成つたのが、木地の胡粉を却つてゆかしく顯して、萌黄に群青の影を添へ、葉をかさね

て、白緑碧藍の花をいだく。さながら瑠璃の牡丹である。

ふと高縁の雨落に、同じ花が二三輪咲いてゐるやうに見えた。扉がぎいぎりくと、僧の姿は裏に隠れつゝ見えずに開く。

ぼかんと立つたのが極りが悪い。

「あゝ、もう彼處から透き見をなすつた。」と、さう思ふほど、眞白き面影、天女の姿は、すぐ其處に見えさせ給ふ。

私は恥ぢて俯向いた。

「そのまゝでお宜しい。」

壇は下駄のまゝでと、彼の僧がいふのである。

なか／＼。

足袋のそんなに汚れてゐないのが、まだしもであつた。

蜀紅の錦といふ天蓋も廣くかゝつて、眞黒き御髪の寶釵の玉

淨瑠璃寺  
京都府相樂郡當  
尾村にある寺。

一つをも遮らない御面影の妙なること、御眼ざしの美しさ、――申さんは恐多い。たゞ西の方遙かに、山城國淨瑠璃寺吉祥天のお寫眞に似させ給ふ。白理・優婉・明麗なる、十八九ばかりの、ほゞ人だけの坐像である。

と手をついて對したが、見上ぐる瞳に、御頬のあたり幽かに、今にも莞爾と遊ばしさうで、まぎ／＼とは拜めない。私は端坐して、古の通夜といふことの意味を確に知つた。このまゝに二た時居たら、微妙な御聲が、あのお口元の微笑から、――

さて壇を退きざまに、僧のとざす扉につれて、畏くもおん名残さへ惜しまれまゐらするやうで、涙ぐましく又額を仰いだ。御堂そのまゝ、私は碧瑠璃の牡丹花の裡に入つて、又牡丹花の裡から出たやうであつた。(七寶の柱)

藤岡作太郎  
文學博士。金澤  
の人。東京帝國  
大學助教。明  
治四十三年歿、  
年四十一。

### 八平安京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり。山川の風景行くと  
ころとして佳ならざるなきが中に、殊に衆美を聚め、群を抜いて



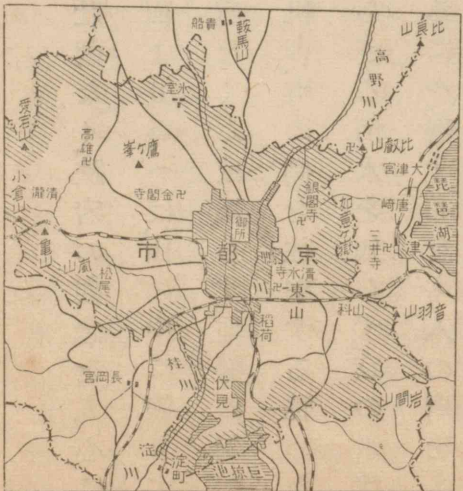
藤岡作太郎

立てるを京都とす。京都附近の景は、日  
本のすべての景をエキスにしたるも  
の規模の雄大豪壯なるものは存せず  
と雖も、華麗幽婉の形態は備へざるな  
し。東に近く比叡如意が嶽より三の峯まで、東山三十六峯笑ふが  
如く、北には鞍馬・貴船・永室・鷹が峯・高雄の山々波濤の如く、西にや  
や隔りて、愛宕・小倉・龜山・嵐山・松尾より山崎に至りて地勢は窮る。  
松柏の綠色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入りまじるあ

三の峯  
京都市東山区の  
稻荷山の頂上を  
いふ。

妻争ひ  
播磨風土記・萬  
葉集等に見えて  
ゐる。  
子の日の遊び  
正月の初子の日  
に小松を曳いて  
千代を祝ふ。  
男山  
京都府綴喜郡。  
官幣大社石清水  
八幡宮が祀られ  
てゐる。

り、或は紅燃ゆる紅葉を織りこみたるあり。一面の草の頂なる四  
明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日夕日に照り  
はゆる色の、千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、北の船岡、西の  
雙が岡は、大和の畝傍香山耳無の  
三山の如く、近く相並びてあらね  
ば、妻争ひの口碑も傳はらねど、子  
の日の遊びに小松曳く樂みなど、  
いづれ劣らぬ處がら南にや、隔  
りて、男山これに對すれど、國家鎮  
護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰  
ぐもかしこし京の東端に沿うて、鴨河の流、糺の河合に高野の支  
流を集めて、南に珠を碎き去り、西に少しく離れて、桂河・大堰の激



湍に清瀧を併せて、琴の音涼しくまた南に向かふ。二河南に合し、更に淀の急流に流れ込みて、沈々として西の方難波をさして走る。

茫洋たる大海浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふる材料に乏しといへども、一面よりいへば、山の中に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長處なくんばあらず。地勢の勾配や、急なれば、蘆間に出て入る白帆の、町の側を往來する眺めなきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水は、わけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、曝す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸にうち上ぐるに、藻の臭ひも添ひ、漁夫などゐる處は、わけて見るにも嗅ぐにも、心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしとい

へども、海なくして清き京都は、益、清かりしなり。

山紫水明の語は、よく京都の景色をいひ表はせり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるなるを知らば、三面を山にして土地濕浸、水分を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。

嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るが中に重なり重なりて海を覆ふ。波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨墨の雲間に火花を散らす。波か、雷か、世界はたゞ一暗黒の中に没し去るかと思はれて凄じかりき。

かくの如く壯絶なる景は、わが數年の滯留中、遂に京都にては



下京より  
作者は前に第三  
高等學校教授で  
あつた。

寝たる東山  
「蒲團著て寝た  
る姿や東山」(服  
部嵐雪)

見ることを得ず。されど下京より吉田に通ひたる朝な朝なの景色の、今も恍惚として眼前にあるを覺ゆ。引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の、一つ一つ彼方へ彼方へと薄くなりて、向うに寝たる東山は、有るか無きかの夢より未だ覺めやらす。吉田の岡に竝び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く薄く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄を洩れ來る。時雨の景色の、又よその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらくと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

温帯の地といへども、大陸の内部は、寒氣凜々たる冬期は、直ち

に烈日赫々たる夏期となり、氣候激變して、その間に和煦の時季を見ず。海岸は、温暖なる處多きかはりには、年中春の如く秋の如くにて、夏冬の峻酷なる風物を感ぜず。四季交代の順序の明らかなること、わが國の如きは少く、わが國にても、花も紅葉もなき浦曲などは、到底、京都の四季の眺めの面白きに及かず。

春立つと思ふばかりに、四方の山々霞籠め、空の色、水の色さへ、昨日に變りておぼゆ。若菜摘み、小松曳くも、新しき年のしるしなり。梅の花散りて鶯老いを啼けば、柳の緑、桃の紅、花の音信あわただしく、夢かとはばかり青葉となりぬ。垣の卯の花、花橘を過ぎがてにする郭公の、暫くして聲もせずなりぬるは、時知りぬるとわけてめでたし。五月雨に軒の玉水ひまなく、公事物詣も途絶えがちなるに、晴るればやがて暑さの凌ぎがたき、それも一時、名越の祓

名越の祓  
陰曆六月晦日に  
各神社にて行ふ  
神事。夏祓・六  
月祓などともい  
ふ。

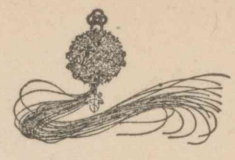
己は...  
やみは...  
まじりし

巴(み)  
巴(おみ)  
巴(おみ)

相和...  
白馬...  
神々...  
曲水...  
端午...  
第一...  
盛ん...  
して...  
淀

に夏も終りぬ。冷風立ちて、一葉の落つるに秋を知り、野邊の千種、  
蟲の聲々、日影さへも限なくて、とりとゝなる物のあはれは、この  
頃ぞまされる。千入に染むる紅葉を秋の名残として、木枯騒がし  
く、淋しき冬の霜に痛み雪に慰みて、早くも年は暮れゆきぬ。  
愛すべき山川の懷に涵養せられたるわが國民は、永く薰育の  
恩を忘れずして、自然を思ふこと深く、わけて四季の景物の變遷  
に注意せしこと、平安朝の如く著しきはあらざるべし。代々の撰  
集の部を分つや、四季は最も重んぜられたり。花や月や、その折々  
毎に合奏、歌合は絶えず。この時代より盛んなりし五節句も、起源  
は多く支那にあるべしといへども、よく國風に融化し、又よく季  
節に調和したる遊樂なり。白馬の節は勇ましく、神々しく、曲水の  
宴の上巳の節となりたるも優しく、端午は第一に盛んにして、淀

(藥玉)



野に引きし菖蒲の根を競ひ、軒に蓬を葺けば藥玉の簾にかゝり  
たるも興あり。七夕の空澄みわたる頃、銀河を隔つる二星を仰ぎ  
ては、人間ならぬ世にも涙をそゞぎ、重陽には菊花の秋に驕れる  
を愛して、吟誦夜を覺えず。近世に至りて、算盤弾く丁稚、剃刀片手  
の下剃までが、「梅咲くや」「初雪や」など首をひねるは、自然を愛する  
國民固有の本性の然らしめたるなりとはいへ、又一は千年以前  
の祖先が、深く四季折々の景色に愴悦せし結果なりといはざる  
べからず。

社會の進歩するに従うて、人工を以て自然に反抗する力は増  
加す。これやがて文化の恩澤なり。今日開明の民は、煉瓦の家屋風  
も透かさず、室内の煖爐春長へなれば、何處にか北風のすさぶを  
知らん。夏は山地綠蔭深き處、海岸風涼しき處に暑さを避く。都會

飛鳥山  
東京市瀧野川區  
にある小丘。

の住居、軒たち續きては、月の盈ち虧け、星影の動くも氣づかず。例へば東京の子供の、山といへば飛鳥山の外を知らず、杉はと聞けば削れる板とのみ思へる類ひ多し。

平安朝の京都は、未だかくの如く人口稠密ならず、文化進歩せず。従うてその住民も、人爲の力を以て自然を左右せんとするほどの欲望を有せずして、却つて山川の美に憧憬せる本性は、飽くまでこれに同化せんと試み、服飾の色彩、第宅庭園の配置、一に模範を自然に取る。平安人士の行動の、いかに麗しく平安京の山紫水明と融和して、天人相映發せるかを見よ。人力を能ふ限り活動せしめ、鬼神を役して自然を己が用に供せしむるは、彼等の事にあらず。自然は人間に近づかずして、人間は自然に近づけり。彼等は工業を知らず、科學を知らず、人力の偉大なるを知らず。たゞ自

然に屈從せり。屈從せるにあらず、愛著せるなり。その愛著せるや、勞働に餘念なき蟻の如くならずして、青天の下に吟哦する雲雀の如し。月卿雲客、生活の苦痛を知らず、運輸の便に乏しき京都の地勢にも、不足を感じず。たゞ景色の美に憧れて、烏兔勿々四百年、政治の實力は、いつしか出でて關東に去りぬ。京都は實務の地にあらずして、風流の地なり。平安朝は實務の時にあらずして、風流の時なりき。(國文學全史)

### 平安京

今此の山背は、山河襟帶、自然に城を成す。この形勝によりて、新號を判すべし。宜しく山背國を改めて山城國とすべし。子來の民、謳歌の輩、異口同辭に號して平安京といふ。今宜しくこれに従ふべし。(續日本紀)

續日本紀  
四十卷。六國史  
の二。

江戸時代

井原西鶴

俳人。文學者。

大阪の人。元祿

六年歿、年五十

二。

室町

京都市烏丸通の

西の通。

烏丸通

今の京都驛の前

を北に通ずる

通。

打算の  
自らの  
ちんちんを  
おこめ

### 九 世界の借家大將

井原西鶴

室町菱屋長左衛門借家に居申され候藤市と申す人、慥に千貫

目御座候。廣き世界に並びなき分限、我なりと自慢申せし。仔細は、

二間口の棚借りにて千貫目持、都の沙汰になりしに、烏丸通に三

十八貫目の家質を取りしが、利銀積りておのづから流れ、始めて

家持となり、これを悔みぬ。今日までは借屋に居ての分限といは

れしに、向後家あるからは、京の歴々の内藏の塵埃ぞかし。

この藤市利發にして、一代の中にかく手前富貴になりぬ第一、

人間堅固なるが身を過ぐる本なり。この男、家業の外に反故の帳

を括りおきて、見世を離れず一日筆を握り、兩替の手代通れば、錢

小判の相場を付けおき、米問屋の賣買を聞合はせ、生薬屋、呉服屋

の若い者に長崎の様子を尋ね、線綿、鹽、酒は江戸棚の狀日を見合はせ、毎日萬事を記しおけば、まぎれしことは此處に尋ね、洛中の重寶となりける。



不斷の身持、肌、單襦袢、大布子綿

井 三百目入れて、一つより外に着るこ

原 となし。袖覆輪といふこと、この人取

西 りはじめて、當世の風俗、見よげに始

末 末になりぬ。革足袋に雪踏を穿きて、

終に大道を走りありきしことなし。

一生の内に、絹物としては紬の花色、一つは海松茶染にせしこと、若い時の無分別と、二十年もこれを悔しく思ひぬ。紋所を定めず、丸の内に三つ引又は一寸八分の巴をつけて、土用ぼしにも疊の上

鳥部山  
京都市東山區。

にぢかには置かず、麻袴かまきに鬼緞おにじゆの肩衣、幾年か折目正しく取りお  
かれける。  
町竝に出づる葬禮には、是非なく鳥部山に送りて、人より後に  
歸りざまに、六波羅の野道にて、丁稚もろとも當藥を引いて、これ  
を蔭ぼしにして、腹藥なるぞとたゞは通らず、躓く處で燧石を拾  
ひて袂に入れける。朝夕の煙を立つる世帯持は、よろづかやうに  
氣を附けずしてはあるべからず。

この男、生まれついて吝せむしきにあらず、萬事の取廻し人の鏡にも  
なりぬべき願ひ、かほどの身代まで、年とる宿に餅搗かず、忙しき  
時の人遣ひ、諸道具の取置きもやかましとて、これも利勘にて大  
佛の前へ誂へ、一貫目につき何程と極めける。十二月廿八日の曙、  
いそぎ擔かひつれ、藤屋見世にならべ、請取り給へ。といふ。餅は搗き

大佛  
京都市東山區方  
廣寺にある大  
佛。

東寺  
京都市下京區。

たての好もしく、春めきて見えける。旦那は聞かぬ顔して、十露盤  
おきしに、餅屋は時分柄にひまを惜しみ、幾度か斷りて、才覺らし  
き若い者、ちきの目りんと請取りて返しぬ。一時ばかり過ぎて、今  
の餅屋請取つたか。といへば、はや渡して歸りぬ。この家に奉公す  
るほどにもなき者ぞ。温もりのさめぬを請取りしことよ。と、又目  
を懸けしに、思ひの外減かのたつこと、手代我を折つて、食ひもせぬ  
餅に口をあきける。  
その年明けて、夏になり、東寺あたりの里人、茄子の初生はつなりを目籠  
に入れて賣りくるを、七十五日の齡、これ樂みの一つは二文、二つ  
は三文に直段を定め、何れか二つ取らぬ仁はなし。藤市は一つを  
二文に買ひていへるは、今一文で、盛りなる時は大きなるがあり。  
と心を附くるほどのこと悪しからず。

屋敷の空地に、柳・柊・樗葉・桃の木、花菖蒲・薺・苘仁など取りまぜて植ゑおきしは、一人ある娘がためぞかし、葭垣に自然と朝顔の這ひかゝりしを、同じながめにははかなきものとして、刀豆に植ゑかへける。

何より我が子を見るほど面白きはなし。娘大人しくなりて、やがて嫁入屏風を拵へ取らせけるに、洛中盡しを見たらば、見ぬ處を歩きたがるべし、源氏・伊勢物語は心のいたづらになりぬべきものなりと、多田の銀山かみやま出盛りし有様書かせける。この心からは、いろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を教へ、ゑひもせず京のかしこ娘となしぬ。

親の世智なることを見習ひ、八歳より墨に袂をよごさず、節句の雛遊びをやめ、盆に踊らず、毎日、髪かしらも自ら梳きて、丸髻に

源氏

源氏物語。五十四帖。紫式部の作。

伊勢物語

二卷。平安朝初期の作。作者不明。

多田の銀山

兵庫縣河邊郡多田村にある古い銀山である。

結ひて、身の取廻し人手にかゝらず、引きならひの眞綿も、着丈の豎横を出かしぬ。いづれ女の子は、遊ばすまじきものなり。

折節は、正月七日の夜、近處の男子を藤市方へ、長者になるやうの指南を頼むとて遣はしける。座敷に燈かゞやかせ、娘を附けおき、露地の戸の鳴る時知らせと申しおきしに、この娘しをらしくかしこまり、燈心を一筋にして、物申ものまうの聲する時、元の如くにして勝手に入りける。三人の客座に着く時、臺所に播鉢の音響きわたれば、客耳を悦ばせ、これを推して「皮鯨の吸物」といへば、「いや、始めてなれば、雑煮なるべし」といふ。又一人はよく考へて、煮麵と落着きける。必ずいふことにしてをかし。

藤市出でて、三人に世渡りの大事を物語して聞かせける。一人申せしは、「今日の七草といふいはれは、如何なることぞ」と尋ねけ

る。あれは神代の始末はじめ、増水といふことを知らせ給ふ。又一人、掛鯛を六月まで荒神の前におきけるは」と尋ぬ。あれは朝夕に肴を食はずに、これを見て食うた心地せよといふことなり。又太箸をとる由來を問ひける。あれは穢れし時、白げて一膳にて一年中あるやうに、これも神代の二柱を表はすなり。よく、萬事に氣を付け給へ。さて宵から今まで、各話し給へば、最早夜食の出づべきところなり。出さぬが長者になる心なり。最前の播鉢の音は、大福帳の上紙に引く糊を搦らした」といはれし。(日本永代蔵)

談林調

白露や無分別なる置きどころ (宗因)

やがて見よ棒くらはせんそばの花 (同)

長持に春かくれ行く更衣 (西鶴)

鯛は花は見ぬ里もありけふの月 (同)

宗因

西山氏。俳人。

肥後國の人。天

和二年歿、年七

十八。

一〇 禪珍内供

(宇治拾遺物語)

宇治拾遺物語十五卷は、作者不明であるが、その内容によつて、鎌倉時代の初期に成つたものと想像される。全篇百九十六の説話から成り、當時の小話などを多く取入れてある。その時代の民衆の生活を窺ふことができる。

昔池尾に禪珍内供といふ僧住みけり。眞言などよく習ひて、年久しく行ひて貴かりければ、世の人々さまざまの禱をせさせけるに、身の徳ゆたかにて、堂も僧坊も、少しも荒れたるところなし。佛供、御燈なども絶えず、折節の僧膳、寺の講演、しげく行はせければ、寺中の僧坊は、隙なく僧も住み賑はひけり。湯屋には湯沸かさぬ日なく、沐みのしりけり。又そのあたりには、小家ども多く出で来て、里も賑はひけり。

今昔物語  
平安時代  
説話集

池尾

京都府宇治郡にある地名。

徳の多い僧かた

湯屋がこころ

さて、この内供は、鼻長かりけり。五六寸ばかりなりければ、頤あごよ  
りさがりてぞ見えける。色は赤紫にて、大柑子だいかんしの膚のやうに、粒立  
ちて膨れたり。痒がること限りなし。提子ていしに湯を返らかして、折敷せしき  
を鼻差入るゝばかり彫りとほして、炎の顔に當らぬやうにして、  
その折敷の穴より鼻をさし出でて、提子の湯にさし入れて、よく  
ゆでて引上げたれば、色は濃き紫色なり。それを側わきのうしろさまに臥せて、  
下に物を當てて人に踏ますれば、粒立ちたる穴毎に、煙のやうな  
る物出づ。それをいたく踏めば、白き蟲の穴毎にさし出づるを、毛  
抜にて抜けば、四分ばかりなる白き蟲を、穴毎に取りいだす。その  
跡は、穴だにあきて見ゆ。それを又同じ湯に入れて、さらめかし沸  
かすに、ゆづれば鼻小さくしほみあがりて、常人たふとの鼻のやうにな  
りぬ。又二三日になれば、前の如くに膨れて大きになりぬ。

白き蟲  
脂肪の蟲のやう  
な形に見えるの  
をいふ。

かくの如くしつゝ、膨れたる日數は多くありければ、物食はん  
とする時は、弟子の法師ほうしに、平らなる板の一尺ばかりなるが、廣さ  
一寸ばかりなるを鼻の下にさし入れて、對ひゐて、上さまへもて  
上げさせて、物食ひはつるまではありけり。他人たにんしてもて上げさ  
する折は、悪わるしくもて上げければ、腹を立てて物も食はず。されば、  
この法師一人を定めて、物食ふ度毎にもて上げさす。

それに、心地あしくて、この法師出でざりける折に、朝粥食はん  
とするに、鼻をもて上ぐる人なかりければ、いかにせんなどいふ  
ほどに、使ひける童の、我はよくもて上げ參らせん。更にその御房  
にはよも劣ちよらじ。といひて、鼻もたげの木を取りて、うるはしく對  
ひゐて、よきほどに、高からず低からずもて上げて、粥を啜すすらすれ  
ば、この内供うちぐい、いみじき上手うへにてありけり。例の法師にはまさりた



り。とて、粥を啜るほどに、この童鼻をひんとて、側ざまに向きて鼻をひるほどに、顫ひて鼻もたげの木搖ぎて、鼻はづれて、粥の中へふたりと打入れつ。内供が顔にも、童の顔にも、粥とばしりて、ひたものかゝりぬ。

内供大きに腹立ちて、頭顔にかゝりたる粥を紙にて拭ひつゝ、「おのれは、まがくしかりける心持ちたる者かな。心なしの乞兒とは、おのれがやうなる者をいふぞかし。我ならぬやごとなき人の御鼻にもこそ參れ、それにはかくやはせんずる。うたてなりける心なしの癡者かな。おのれ立て、立て。とて追ひてければ、立つまに、世の人のかゝる鼻持ちたるがおはしまさばこそ、鼻もたげにも參らぬ。をこの事のたまへる御房かな」といひければ、弟子ども、物の後ろに逃げのきてぞ笑ひける。

徒然草

二卷。兼好法師の作。

物のあはれは「春はたゞ花の  
一重に咲くばか  
り物のあはれは  
秋ぞまされる」  
(拾遺集、紀貫  
之)

花橘は

「さ月まつ花橘  
の香をかげば昔  
の人の袖の香ぞ  
する」古今集、  
讀人知らず

一一 徒然草抄

(徒 然 草)

四季の變遷

をりふしの移り變るこそ、ものごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまさされ。と、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮きたつものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌えいづる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうく、氣色だつほどこそあれ、をりしも雨風うち續きて、心あわたしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞなやます。

花橘は名にこそ負へれ、なほ梅のほひにぞ、いにしへのことも、たち返り戀ひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつ

灌佛  
四月八日に行は  
れる灌佛會。ま  
た佛生會ともい  
ふ。

まつり  
賀茂祭。四月中  
の酉の日に行は  
れる。今は五月  
十五日)

六月祓  
六月三十日に行  
はれる大祓。

かなきさましたる、すべて思ひすてがたきことおほし。  
「灌佛のころ、祭のころ、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世  
のあはれも、人の戀ひしさも勝れ」と、人の仰せられしこそ、げにさ  
るものなれ。五月、あやめ葺くころ、早苗とるころ、水雞のたゝくな



六月 祓 (筆琳光形尾)

ど、心細からぬ  
かは。六月の頃、  
あやしき家に  
夕がほの白く  
見えて、蚊遣火

ふすぶるもあはれなり。六月祓、またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やう／＼夜寒になるほど、雁鳴  
きてくるころ、萩の下葉いろづくほど、わさ田刈りほすなど、取り

あつめたることは、秋のみぞおほかる。また、野分のでしたこそを  
かしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語枕草子などにことふり  
にたれど、おなじこと、また今さらにはじともあらず。おほし  
きこといはぬは、腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢき  
なきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきに  
もあらず。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ／＼劣るまじけれ。汀の草に  
紅葉の散りとゞまりて、霜いとしろう置けるあした、遣水より煙  
の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる頃  
ぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月  
の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心細きものなれ。御佛名  
荷前の使立つなどぞ、あはれにやんどなき。公事どもしげく、春

御佛名  
十二月に行はれ  
る禁中讀經の公  
事。  
荷前の使  
十二月に行はれ  
る十陵八墓に幣  
帛を奉る御使。

追儼  
十二月晦の夜行  
はれる儀式。



追儼 (筆恭爲泉冷)

のいそぎに取りかさねて催し行はるゝさまぞ、いみじきや。

追儼より四方拜につゞくこそ面白けれ。晦の夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門たゝき、走りありきて、何事にかあらん、事々しくのゝしりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすがに音なくなりぬるこそ、年の名残も心細けれ。なき人のくる夜とて、魂祭るわざは、このごろ都にはなきを、あづまの方には、なほすることにてありしこそあはれなりしか。かくて、明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えぬ

ど、ひきかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、華やかに嬉しげなるこそ、またあはれなれ。

よろづのこと

よろづのことは、月見るにこそ慰むものなれ。ある人の、月ばかり面白きものはあらじ。といひしに、またひとり、露こそあはれなれ。と争ひしこそをかしけれ。折に觸るれば、何かはあはれならざらん。月花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。沉湘日夜東に流れ去る。愁人のために住ることしばらくもせず。といへる詩を見侍りしこそ、あはれなりしか。嵇康も、山澤に遊びて魚鳥を見れば、心たのしぶ。といへり。人遠く、水草清きところにさまよひありきたるばかり、心慰むことはあらじ。

沉湘日夜  
戴叔倫の詩の  
句。  
嵇康  
支那三國時代の  
人。

本間久雄  
文學博士。山形  
縣の人。早稻田  
大學教授。

### 一二 物のあはれ

本間久雄

「物のあはれ」といふ言葉は、わが國では、昔からいひ古された言葉であるが、この言葉には、文學の人生にもたらす効果、並びに吾の文學に對する態度といふことについての、重大な意味が含まれてゐる。だから、この言葉の意味を詳しく考へ直すといふことも、あながち無用のわざではあるまい。

「物のあはれ」といふ言葉は、用ひられる場合によつても、用ひる人によつても異なつてゐる。例へば、兼好法師の「徒然草」の中にも、「あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住みはつるならひならば、いかに物のあはれもなからん」といつた有名な文句は、人間に死といふものがなければ、世の中に悲しいこと

はないであらうといつたので、こゝでは、たゞ悲みとか哀傷とかいふやうな意味である。しかし、同じ兼好法師が同じ書物の中で、人間はあらゆる動物の中で、一番長生きをするものであるにかかはらず、いつまでもいつまでも長生きしたいといふ慾心が旺んだといふことを書いて、「ひたすら世を貪る心のみ深く、物のあはれも知らずなりゆくなんあさましき」といつてゐる場合の、「物のあはれ」は、前とは趣が異なつて、單に悲みといふこと以上に、複雑なものになつてゐることがわかる。

「物のあはれ」の文學的意義について、最も透徹した意見を示したのは、本居宣長である。彼はその「源氏物語玉の小櫛」の中で、このことを論じてゐるが、先づ「あはれ」といふ言葉の意義から始めて、次のやうにいつてゐる。

本居宣長  
國學者。伊勢國  
の人。享保元年  
歿、年七十二。  
玉の小櫛  
九卷。源氏物語  
の研究書。本居  
宣長の著。

「あはれ」といふは、もと見るもの、聞くもの、觸るゝごとに、心に感じて出る歎息の聲にて、今の俗言にも「あゝ」といひ、「はれ」といふ、これなり。たとへば、月花を見て感じて「あゝ、見事なる花ぢや。」はれ、よい月かな。などといふ。あはれといふは、この「あ」と「はれ」との重なりたるものにて、漢文に「嗚呼」などある文字を「あゝ」と讀む、これなり。古言に「あな」「又」「あや」などいへる「あ」も同じ。又「はや」とも「は」ともいへる「は」も、かの「はれ」の「は」と同じ。又後の書に「あつばれ」といふも、「あはれ」と感ずる詞にて、同じことなり。

即ち宣長の説明でもわかる通り、「あはれ」といふことは、善きにつけ悪しきにつけ、物に感ずることをいふので、「物」はたゞ添へていふこと、例へば「たゞいふ」といつてよいところを、「物いふ」といつ

たり、たゞ「かたる」といつてよいところを、「物がたる」といつたり、その他「物まうて」「物見」「物いみ」などいふ類ひで、「物のあはれを知る」といふことは、宣長の言葉を借りていふと、「なにごとにまれ、感ずべきことにあたりて、感ずべきことゝろを知りて感ずる。」をいふのである。即ち「感受性」を活かせるといふ意味である。宣長は更に續けていふ。

必ず感ずべきことにありても、心動かず感ずることなきを、「物のあはれ知らず」といひ、「心なき人」とはいふなり。物のわきまへ心ある人は、感ずべきことには、おのづから感ぜではえあらぬわざなるに、さもあらぬは、何とも思ひわくかたなくて、必ず感ずべき心を知らねばぞかし。

といつてゐる。そして文學を研究するのは、この「物のあはれ」を知

紀貫之  
歌人。天慶九年  
歿。

るのであるといつてゐるのである。

蓋しこの「物のあはれ」を知らしめるといふことは、事實また文學の與へる大きな力であるといはなくてはならない。紀貫之の有名な古今集の序にも、

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの、聞くものにつけていひいだせるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、何れか歌を讀まざりける力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

とあるが、これ即ち歌が「物のあはれ」を感ぜしめるからである。

いへる。

本居宣長は、同じ書物の中で、小説の意義について次のやうにいつてゐるが、これは、移して以て文學全體の意義を説いたものだといふことも出来る。即ち曰く、

物語は、世の中にありとある、善きこと、悪しきこと、珍らしきこと、可笑しきこと、面白きこと、あはれなることなどの、さまざまを書きあらはして、つれづれなるほどのもてあそびにし、又は、心のむすぼれて物思はしきをりなどの慰めにもし、世の中のある様子も心得て、物のあはれをも知るものなり。

實にいみじくいひ得てゐるではないか。即ち「物のあはれ」を知るといふことは、世の中のさまざまの人間關係を、單に表面的で

はなく、底の底まで立ち入つて、深くしみぐと味はふことをいふのである。今日の新しい言葉でいへば、全圓的な人生味とか全體としての人生の味ひとかを知るといふ意味である。そして、かういふ意味を味は、せることこそ、實に文學の人生にもたらす最も大きな効果であるといへる。

だから、文學を本當に味はつてゐる人、即ちほんたうに「物のあはれ」を感じてゐる人と、さうでない人とは、その人の内生活は大變に違つてゐる。文學を味はつてゐる人は、全體としての人生を見るから、同情心が非常に豊かである。だから、たとへば、こゝに極惡無道の人間があつたとしても、それをすぐさま極惡無道な人間としては取扱はない。どうして、一般の人と同じ人間でありながら、彼のみがさういふ極惡無道な人間になつたかといふ徑

路を、まづ理解して、一概には彼を憎む氣持にはなれない事實すぐれた文學は、その作者もさういふ同情心の深い人であり、その作品にもさういふ同情心が溢れてゐる。

たとへば、わが元祿文學の代表者である近松門左衛門の、「女殺油地獄」の主人公の油屋與兵衛といふのは、彼自らも後に後悔して、思へば二十年來の不幸無法の惡業が魔王となつて、與兵衛が一心の眼をくらし、「といつてゐる通りの極惡人ではあるが、この作をほんたうによく讀んだ人には、どうしてもこの與兵衛をほんたうには憎み得ない。境遇と性格とから、自然にさうならざるを得なくなつたやうに感じて、彼を憎む前に、先づ同情する。沙翁の作なども同じことで、彼は實に、ハムレットにも、マクベスにも、オセローにも、更にイヤゴーにも、同じやうな同情の心を持つ

近松門左衛門  
名は杉森信盛。  
淨瑠璃作者。長  
門國の人。享保  
九年歿、年七十  
二。  
沙翁  
英國の劇詩人シ  
エイクスピアの  
こと。(一五六  
四—一六一六  
年)  
ハムレット  
沙翁の作「ハム  
レット」の主人  
公。  
マクベス  
沙翁の作「マク  
ベス」の主人公。  
オセロー  
沙翁の作「オセ  
ロー」の主人公。  
イヤゴー  
沙翁の作「オセ  
ロー」の中の人  
物。

て對してゐるのである。随つて沙翁の作を讀んでは、その作や人物が、假にイヤゴのやうな悪人であつても、吾々はそれを憎む氣持にはなれない。

かやうに見て來ると、物のあはれを文學によつて知ることとは、同時に人生そのものを知ることだともいへる。アーノルド・ベンネットが、その近著「文學趣味構成法」の中で、「文學の理解ある鑑賞といふことは、この世界の理解ある鑑賞といふことを意味する。」といつたのと同じ意味だともいへる。文學の社會性や道德性は、すべてこの理解ある鑑賞といふことを基礎として、始めてその意義を展開して來る。私は、この意味で、「物のあはれ」を知ること、先づ文學鑑賞の基礎を置く。(現代隨筆大觀)

アーノルド・ベン  
ネット

英國の文學者。  
(一八六七—  
九三一年)

### 一三 流泉・啄木

(今昔物語語)

今昔物語三十一卷は、平安朝の末期に、源隆國が編んだものといはれてゐる。印度・支那・日本の三國に亙り、廣く説話類を集めてをり、當時の風俗思想を研究するによい手引である。この系統を引いた書に宇治拾遺物語がある。

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子兵部卿の親王の子なり。萬のことやんごとなかりける中にも、管絃の道になん極みたりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえならず吹きけり。この人、村上の御時に殿上人にてありけり。その時に、逢阪の關に、一人の盲庵めくらを造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは、敦實と申しける式部卿の宮の雜色にてなんありける。この宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年

源博雅

琵琶の能手。克

明親王の長子。

博雅三位と稱し

た。天元三年歿、

年六十二。

延喜

醍醐天皇を申

す。

兵部卿の親王

克明親王。

村上

村上天皇を申

す。

敦實

宇多天皇の第八

皇子。宇多源氏

の祖。康保四年

歿、年七十五。



頃、琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙に弾く。然る間、この博雅、この道を強ちに好みて求めけるに、かの逢阪の關の盲、琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家異様ことごとなれば行かずして、人をもて内々に蟬丸にいはせけるやう、など思ひかけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし。」と盲これを聞きて、その答をばせずして曰く、

よの中はとともかくても過してむ宮も藁屋もはてしな  
ければ

と使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくく覺えて、心に思ふやう、我強ちにこの道を好むによりて、必ずこの盲に會はんと思ふ心深く、それに、盲命あらんことも測り難し、また我も命を知らず、琵琶に流泉、啄木といふ曲あり、これは

世に絶えぬべきことなり、唯この盲のみこそこれを知りたるなれ、かまへてこれが弾くを聞かんと思ひて、夜かの逢阪の關に行きにけり。されども、蟬丸その曲を弾くことなかりければ、その後



(筆卷爲田岡) 關の阪逢

三年の間、夜な夜な逢阪の盲が庵のほとりに行きて、この曲を今や弾く今や弾くと、密かに立ち聞きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはかげりて、風少し打

吹きたりけるに、博雅、あはれ今夜は興あり、逢阪の盲今夜こそ流泉啄木は弾くらめと思ひて、逢阪に行きて立ち聞きけるに、盲琵琶を搔鳴らして、物あはれに思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞くほどに、盲獨り心を遣りて詠じて曰く、

逢阪の關のあらしのはげしきにしひてぞゐたる世を過すとして

とて琵琶を鳴らすに、博雅これを聞きて、涙を流して、あはれと思ふこと限りなし。盲獨り言に曰く、あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬすきものや世にあらん。今夜心得たらん人の來よかし。物語せん。といふを、博雅聞きて聲を出して、王城に在る博雅といふものこそこれに來れ。といひければ、盲の曰く、かく申すは誰にかおはします。と。博雅の曰く、我はしかくの人なり。強ちにこの道

を好むによりて、この三年この庵のほとりに來つるに、幸ひに今宵汝に會ひぬ。と。盲これを聞きて喜ぶ。その時に、博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅、流泉啄木の手を聽かん。といふ。盲、故宮はかくなん弾き給ひし。とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、返すく喜びて、曉に歸りにけり。

これを思ふに、諸の道は、たゞかくの如く好むべきなり。それに近代は、げに然らず。されば、末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸卑しきものなりと雖も、年頃宮の弾き給へる琵琶を聽きて、かく極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりければ、逢阪にはゐたるなりけり。それより盲の琵琶は、世に始れるなりとなん語り傳へたるとや。

一四 うたかた

(方丈記)

方丈記一卷は、鴨長明の作である。ゆく川の流は云々の名文に始り、平安朝末期の大火・大風・飢饉・疫病・地震など、天災・續發の様を述べ、それらの災厄を自ら経験した著者が、齡六十に近づいて日野山に隱棲し、方丈の庵に自適の生活を送るに至つた心境を述べたもので、當時に於ける隨筆の異彩である。

大火

凡そ物の心を知れりしよりこのかた、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、やゝ度々になりぬ。

去ぬる安元三年四月二十八日かよ。風烈しく吹きて靜かならざりし夜、戌の時ばかり、都の巽かまふより火出でて來て、乾いづるに至る。はて

安元三年  
高倉天皇の御  
宇。

には、朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜がほどに塵灰となりなき。火元は樋口・富小路とかや。病人をやどせる假屋より出て來けるとなん。吹きまよふ風に、とかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりはひたすら炎を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる炎、飛ぶが如くにして一二町を越えつゝ、移り行く。その中の人うつし心あらんや。あるは煙に咽びて倒れ伏し、あるは炎にまぐれて忽ちに死にぬ。あるは又僅に身一つ辛くして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍萬寶、さながら灰燼となりなき。その費えいくそばくぞ。

辻風

治承四年  
安徳天皇の御  
宇。

又、治承四年卯月二十九日の頃、中御門京極のほどより、大きな辻風起りて、六條わたりまでいかめしく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくる間に、その中に籠れる家ども、大きなも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながらひらに倒れたるもあり、桁柱ばかり残れるもあり。又門の上を吹きはなちて四五町が外に置き、又垣を吹きはらひて隣と一つになせり。況や家の内の寶數を盡くして空にあがり、檜皮葺板のたぐひ冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如くに吹きたてたれば、すべて目も見えず。おびたゞしく鳴りとよむ音に、物いふ聲も聞えず。地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。家の損亡せるのみならず、これをととりつくろふ間に、身をそこなひてかたはづけるもの數を知らず。

この風<sup>ウツシヨ</sup>坤の方に移り行きて、おほくの人の歎きをなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝることやはある。たゞごとにあらず、さるべき物のさとしかなとぞ疑ひ侍りし。

遷都

同じ年  
治承四年。

又、同じ年の水無月の頃、俄に都うつり侍りき。いと思ひの外なりしことなり。大かた、この京の始を聞けば、桓武天皇の御時都と定まりにけるより後、すでに數百歳を経たり。ことなる故なく、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の人たやすからず憂へあへるさま、理りにも過ぎたり。されども、とかくいふかひなく、御門より始め奉りて、大臣公卿悉く攝津國福原の京に移り給ひぬ。世に仕ふるほどの人、誰か一人故郷に残り居らん。官位に思ひをかけ、主君の蔭を頼むほどの人は、一日なりともとく移らん

福原  
今の神戸市須磨  
區。

と勵みあへり。時を失ひ世にあまされて期するところなき者は、愁へながら止まりぬたり。軒を争ひし人の住ひ、日を経つゝ荒れゆく。家は毀たれて淀川に浮かび、地は目の前に畠となる。人の心皆改りて、たゞ馬鞍をのみ重くし、牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の莊園をば好まず。

その時、おのづから事の便りありて、攝津國今の京に至れり。處の有様を見るに、その地ほどせばくて條里を割るに足らず。北は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。波の音常に喧しくて、潮風殊にはげしく、内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なか／＼様かはりて優なるかたも侍りき。日々に毀ちて川もせきあへず運びくだす家は、いづくに造れるにかあらん。猶空しき地は多く、造れる家は少し。故郷は既に荒れて、新都は未だ成らず、

かの木の丸殿  
「朝倉や木の丸殿に我がをれば名告をしつゝ行くは誰が子ぞ」  
(天智天皇御製)

ありとしある人みな浮雲の思ひをなせり。もとよりこの處にゐたる者は地を失ひて愁へ、今移り住む人は土木の煩ひあることを歎く。道のほとりを見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣冠布衣なるべきは直垂を著たり。都の手ぶり忽ちに改りて、たゞ鄙びたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞き置けるもしるく、日を経つゝ世の中浮立ちて、人の心もをさまらず。民の愁へつひに空しからざりければ、同年の冬、なほこの京に歸り給ひにき。されど、毀ちわたせりし家どもはいかになりけるにか、悉く元のやうにも造らず。

ほのかに傳へ聞くに、古の賢き御代には、憐みをもて國を治め給ふ。則ち御殿に茅を葺きて、軒をだにもとゝのへず、煙の乏しきを見給ふ時は、限りある貢物をさへゆるされき。これ民を恵み、世

御殿に茅を葺きて云々  
支那の帝堯の故事。「茅茨剪らず」(書經)  
煙の乏しきを云々  
仁徳天皇の御盛徳を偲び奉る。

を助け給ふによりてなり。今の世の中のありさま、昔に准へて知りぬべし。

地震

又、文治元年の頃、大地震ダイシふることに侍りき。そのさま世の常ならず。山は崩れて川を埋み、海は傾きて陸を浸せり。土裂けて水湧きあがり、巖割れて谷にまろび入り、渚こぐ船は波に漂ひ、道行く駒は足のたちどを惑はせり。況や、都のほとりには、在々處々、堂舎・塔廟一つとして全からず。あるは崩れ、あるは倒れぬる間、塵灰立ちあがりて、盛んなる煙のごとし。地の震ひ、家の破るゝ音、雷いかづちに異ならず。家の中に居れば、忽ちに打ちひしげなんとす。走り出づれば、また地割れ裂く。羽なければ空へもあがるべからず。龍ならねば雲にのぼらんこと難し。恐れの中に恐るべかりけるは、たゞ地震

文治元年  
後鳥羽天皇の御  
宇。

なりけりとぞ覺え侍りし。

その中に、ある武士のひとり子の六つ七つばかりに侍りしが、ついひぢのおほひの下に小家を造りて、はかなげなるあとなしごとをして遊び侍りしが、俄に崩れ埋められて、あとかたなく平に打ちひさがれたるを、父母抱へて、聲も惜しまず悲しみあひて侍りしこそ、あはれに悲しく見侍りしか。子の悲みには、猛き武士も恥を忘れけりと覺えて、いとほしく理りかなとぞ見侍りし。かく夥しくふることはしばしにて止みにしが、その名残しばしは絶えず。世のつねに驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日・二十日過ぎにしかば、やう／＼間どほになりて、あるは四五度、二三次、もしは一日まぜ、二三日に一度など、大かたその名残三月ばかりや侍りけん。

保元の亂  
平清盛三年

### 一五 爲朝の弓勢

(保元物語)

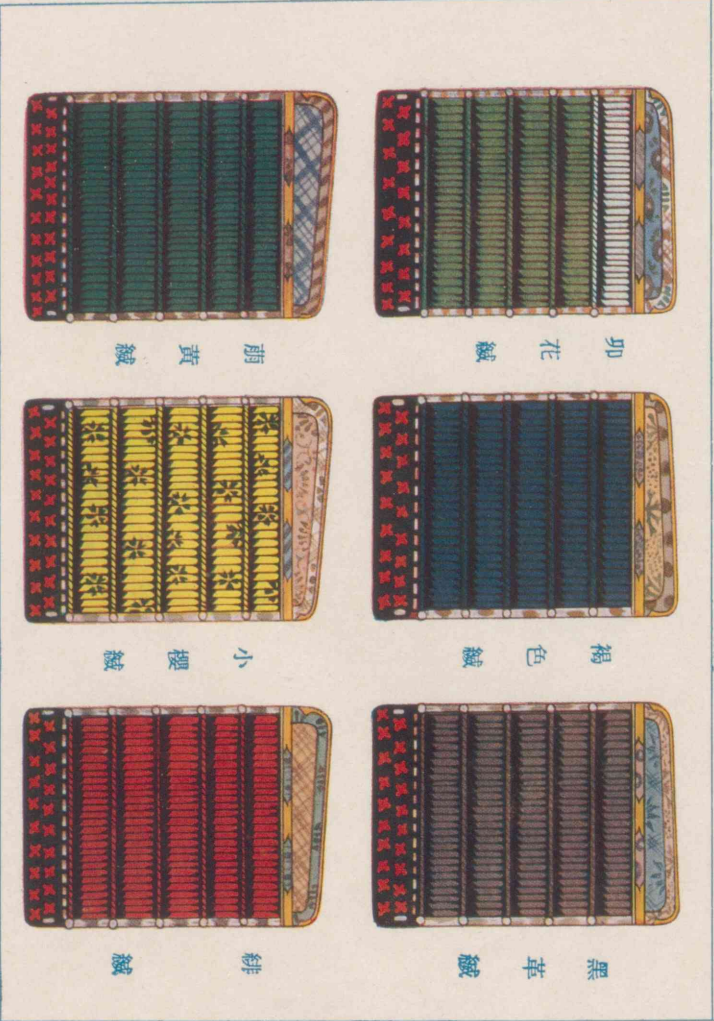
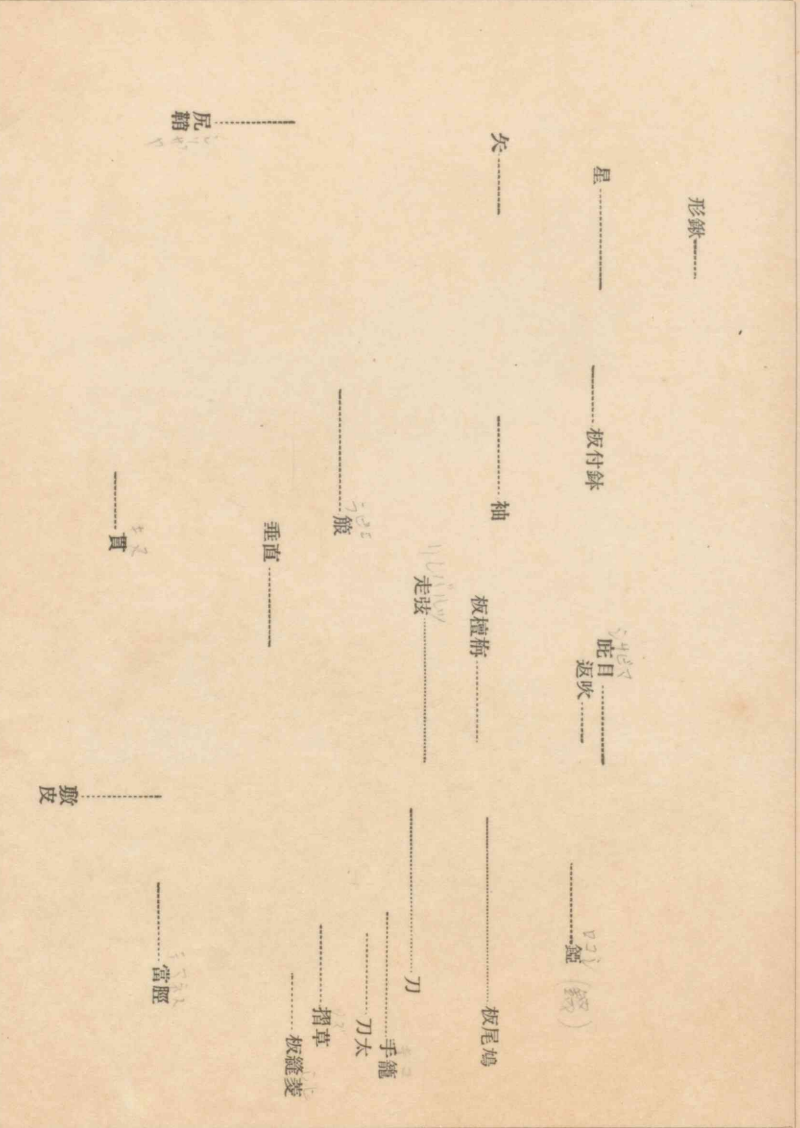
保元物語平治物語次課参照は、共に三卷より成り、同じ作者の手になるものと考へられてゐるが、その何人であるかは不明である。平家物語よりは先に作られたのであらうといはれる。保元物語は、保元の亂を中心として、前後二十八年に互る記事であり、平治物語は、平治の亂を中心として、前後四十一年に互る記事である。文章は、漢語を多く交へて簡潔雄渾であり、相並んで軍記物語中の佳作と稱される。

安藝守  
平清盛をいふ。

安藝守は、二條河原の東堤の西に向かつて控へたり。その勢の中より、五十騎ばかり先陣に進んでおし寄せたり。こゝを固め給ふは誰人ぞ。名告らせ給へ。かく申すは、安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人、古市伊藤武者景綱、同じき伊藤五、伊藤六とぞ名告りける。

安藝守  
平清盛をいふ。

として、前後四十一年に互る記事である。文章は、漢語を多く交へて簡潔雄渾であり、相並んで軍記物語中の佳作と稱される。  
 安藝守は、二條河原の東堤の西に向かつて控へたり。その勢の中より、五十騎ばかり先陣に進んでおし寄せたり。こゝを固め給ふは誰人ぞ。名告らせ給へ。かく申すは、安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人、古市伊藤武者景綱、同じき伊藤五・伊藤六。とぞ名告りける。



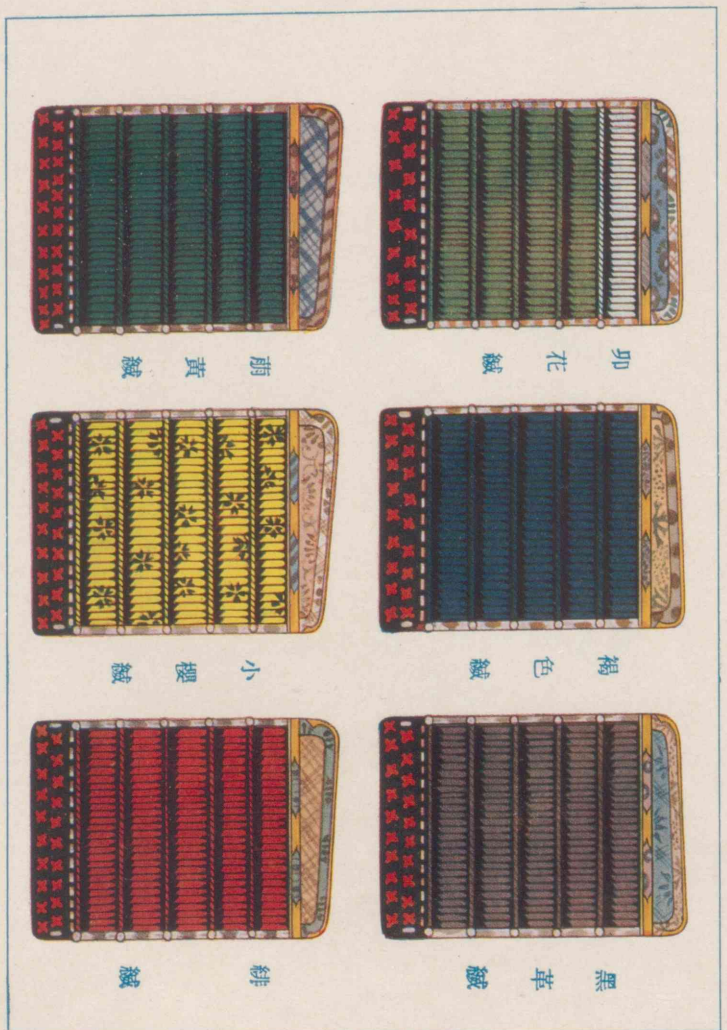
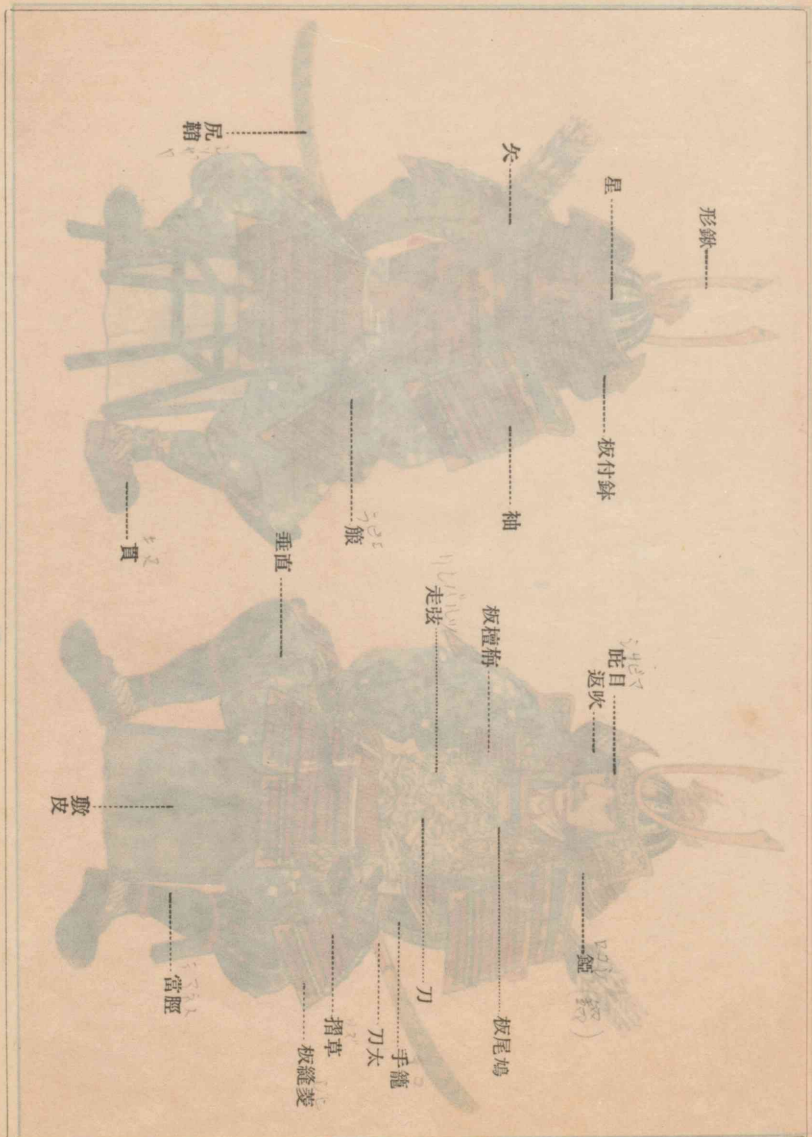
織 (糸、絹、紙、麻、草)



安藝守  
平清盛をいふ。

として、前後四十一年に互る記事である。文章は、漢語を多く交へて簡潔雄渾であり、相並んで軍記物語中の佳作と稱される。

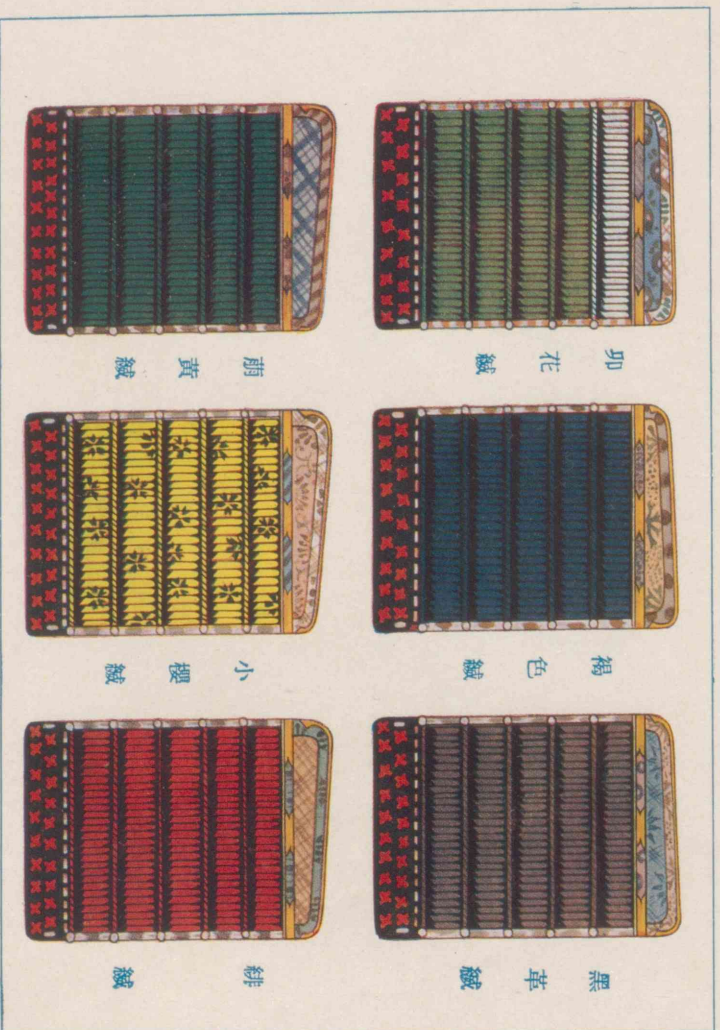
安藝守は、二條河原の東、堤の西に向かつて控へたり。その勢の中より、五十騎ばかり先陣に進んでおし寄せたり。こゝを固め給ふは誰人ぞ。名告らせ給へ。かく申すは、安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人古市伊藤武者景綱、同じき伊藤五・伊藤六。とぞ名告りける。



絨 (糸70カワ53)



武具



織 (糸2水22-5-3)

大日本  
刀  
鎧  
槍  
旗  
扇  
馬  
弓  
矢  
鞍  
櫛  
髪  
鬘  
腰刀  
腰拵  
腰拵  
腰刀  
腰拵  
腰刀  
腰拵

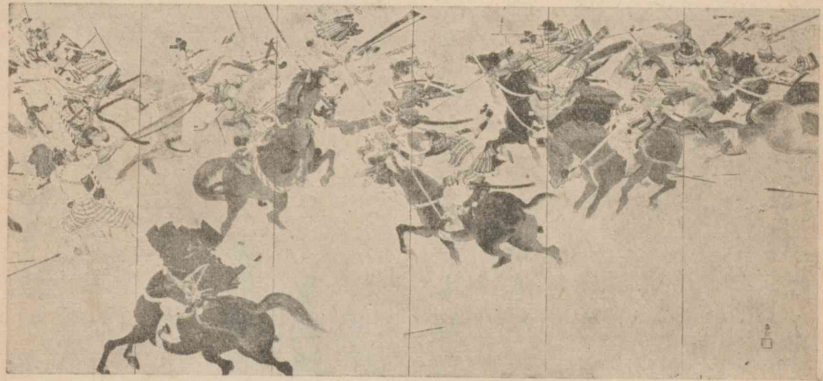
源義家  
八幡殿  
す。  
桓武天皇を申

八郎  
源爲朝をいふ。  
柏原天皇  
桓武天皇を申

下  
徳のまはつん  
ふい倍は用ひ  
小よ小からけ  
月ころ小長

八郎これを聞き、汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代久しく成りくだれり。源氏は誰かは知らぬ。清和天皇より爲朝までは九代なり。六孫王より七代八幡殿の孫、六條判官爲義が八男、鎮西八郎爲朝ぞ。景綱ならば引退け。とぞ宣ひける。景綱昔より源平兩家、天下の武將として、違勅の輩を伐つに、兩家の郎等、大將を射ること互にこれあり。同じ郎等ながら、公家にも知られ参らせたる身なり。その故は、伊勢國鈴鹿山の強盜の張本、小野七郎を擲めて、副將軍の宣旨を蒙りし景綱ぞかし。下郎の射る矢、立つか立たぬか、御覽ぜよ。とて、よつ引いて射たれども、爲朝これを事ともせず、合はぬ敵と思へども、汝が詞のやさしきに、矢一つ給はらん。請けて見よ。且は今生の面目、又は後生の思ひ出にもせよ。とて、三年竹の節近なるを、少しおし磨

矢の吉  
朱竹(の)尾  
籠



血 路

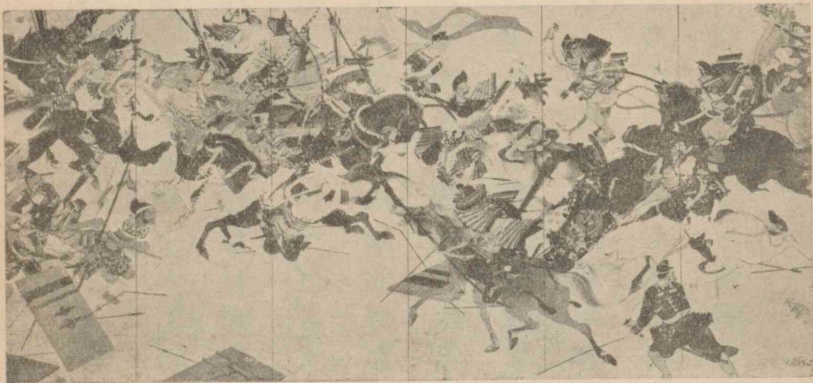
いて、山鳥の尾を以て作ぎたるに、七寸五分の丸根の籠中過ぎて籠代のあるを打食はせ暫し保つてひようと射る。眞先に進んだる伊藤六が胸板かけず射通し、餘る矢が伊藤五が射向の袖に裏返してぞ立つたりける。六郎は矢場に落ちて死ににけり。

伊藤五この矢を折りかけて大將軍の前に參つて、八郎御曹司の矢御覽候へ。凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死に候ひぬ」と申せば、安藝守を始め、この矢を見る兵ども、皆舌を振つて

ぞ恐れける。

景綱申しけるは、彼の先祖八幡殿、後三年の合戦の時、出羽國金澤城にて、武則が申しけるは、『君の御矢に中る者、鎧兜を射通されずといふことなし。抑君の御弓勢を慥に拜み奉らばや』と望みければ、義家革よき鎧三領重ね、木の枝に懸けて、六重ねを射通し給ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。これよりいよく兵ども歸服しけりと申し傳へて、聞くばかりなり。眼前にかゝる弓勢も侍るにや。あな懼ろし。とぞ怖ぢあへ

金澤城  
秋田縣仙北郡金澤本町に城跡がある。  
武則  
清原武則をいふ。



(筆 觀 國 竹 尾)

(澤瀉絨)



る。かく口々にいはれて、大將宣ひけるは、必ず清盛がこの門を承つて向かひたるにもあらず。何となく押寄せたるにてこそあれ。何方へも寄せよかし。さらば東の門か。とあれば、兵皆、それもこの門近く候へば、もし同じ人や固めて候ふらん。たゞ北の門へ向かはせ給へ。といへば、さもいはれたり。今は程なく夜も明けなんぞ。然らば小勢に驅立てられんも見苦しかりなん。とて引退く處に、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、赤地の錦の直垂に、澤瀉絨の鎧に、白星の兜を著、二十四さしたる中黒の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黄土器毛なる馬に乗り、進み出でて、勅命を蒙りて罷り向かひたる者が、敵陣強しとて引返すやうやあるべき。續けや若者ども。とて驅出でけるを、清盛これを見て、有るべうもなし。あれ制せよ。者ども。爲朝が弓勢は目に見えたることぞかし。過ちすな。と宣ひけ

れば、兵ども前に馳せ塞がりければ、力なく、京極を上りに、春日表の門へぞ寄せられける。

さる程に、夜も漸う明けゆくに、主もなき放れ馬、源氏の陣へ驅入つたり。鎌田次郎これを捕らせて見るに、鞍壺に血溜り、前輪は破れて、尻輪に鑿の如くなる。鐵留れり。これを大將軍に見せ奉りて、今夜、筑紫の御曹司の遊ばされてありげに候。あないかめしの御弓勢や。と申しければ、義朝、八郎は今年十八九の者にてこそあれ。未だ力も固まらじ。それは敵を威さんとして作りてこそ放しけめ。それには臆すべからず。汝向かつて一當て當てて見よ。と宣へば、さ承り候ふ。とて、正清、百騎許りにて押寄せて、下野守の郎等に、相模國の住人鎌田次郎正清、と名告りければ、扱は一家の郎従にござんなれ。大將軍の矢面をば引退け。と宣へば、元は一家の主君な

八逆  
謀反・謀大逆・謀  
叛・惡逆・不道・  
大不敬・不孝・不  
義。  
(牛頭)



れども、今は八逆の兇徒なり、違勅の人々討取つて功名せよや、者ども。といひも果さず、よつ引いて放す矢が、御曹司の半頭ハツゴにかりと中つて、兜の鉦かねに射附けたり、爲朝餘りに腹を立て、この矢を搔かいかなぐつて投げ捨て、おのれほどの者をば手取りにせん。とて驅け給へば、須藤九郎家季、惡七別當以下、例の二十八騎續きたり。正清、かなはじとや思ひけん、百騎の勢を引具して、河原を下りに、五町ばかり振ひ振ひ逃げたりけり。御曹司は弓をば脇にかい挟み、大手を廣げて何處まで何處までと追はれけるが、さのみ長追ひなせそ。判官殿は心こそ猛くおはしませども、年老い給ひぬ。残りの人々は、口はきき給へども、さのみ心にくからず。小勢にて門破らるな。返せや。とて引返す。

鎌田は河原の西へ引けば、大將軍の陣の前、敵の追懸けんも惡

寶莊嚴院  
京都市左京區吉  
田の西方にあつ  
た寺院。

しかりなんと思ひて、眞下りに逃げたりけるが、敵引き返すと見てければ、河を筋違すぢがひに馳せ渡して、遁れ參つて候。坂東にて多くの軍に逢うて候へども、これほど軍立て烈しき敵に未だ逢はず候。雷電などの落ちかゝらんは事の數にも候はじ。と申しければ、義朝、それは、聞ゆる者と思ひて怖づればこそさあらめ。八郎は筑紫そだちにて、舟の中にて遠矢を射、徒立などは知らず、馬上の業は坂東武者にはいかで及ばん。馳せならべて組めや、者ども。と下知せられければ、相模國の住人須藤刑部丞俊通、その子瀧口俊綱、海老名源八季、定秦野次郎延景等を始として、二百餘騎にて追懸けたり。爲朝、寶莊嚴院の西裏にて返し合せて、火出づるほどぞ戦うたる。

大將は赤地の錦の直垂に、黒絲緘の鎧に、鍬形打つたる兜を著

黒馬に黒鞍置いて乗つたりけり。鎧踏ん張り、突立ちあがり、大音  
 揚げて、清和天皇九代の後胤、下野守源義朝、大將軍の勅命を蒙つ  
 て罷り向かふ。もし一家の氏族ならば、速に陣を開いて退散すべ  
 し。とぞ宣ひける。爲朝聞きも敢へず、嚴親判官殿、院宣を蒙り給ひ  
 て身方の大將軍たる、その代官として鎮西八郎爲朝、一陣を承つ  
 て堅めたり。とぞ答へける。義朝重ねて、さては遙かの弟ござんな  
 れ。汝兄に向かつて弓引かんこと、冥加なきにあらざや。且は宣旨  
 の御使なり。禮儀を存せば、弓を伏せて降参仕れ。とぞ申されける。  
 爲朝、又、兄に向かつて弓引かんが冥加なしとは理なり。正しく院  
 宣を蒙つたる父に向かつて、弓引き給ふはいかに。と申されけれ  
 ば、義朝道理にや詰められけん。その後は音もせず。武藏相模のは  
 やり男の者どもが驀地に撃つてかゝるを、爲朝暫し支へて防ぎ

けるが、敵は大勢なり、駆け隔てられては、判官のため悪しかりな  
 んと思ひて、門の中へ退く。敵これを見て、防ぎかねて引くとや思  
 ひけん。勝つに乗つて門の際まで攻めつけて、入れかへ入れかへ  
 揉うだりけり。

こゝに、爲朝敵の勢越しに見れば、大將義朝、大の男の、大きなる  
 馬には乗つたり、人にすぐれて軍の下知せんとて、突立ちあがり  
 たる内兜、誠に射よげに見えければ、願ふところの幸ひ、得たりと  
 悦んで、件の大矢を打ちつがひ、たゞ一矢に射落さんと打ちあげ  
 けるが、待てしばし、弓矢取る身のはかりごと、汝は内の御方へ参  
 れ。われは院方へ参らん。汝負けば憑め、助けん。われ負けば汝を憑  
 まん。など約束して、父子たち別れてかおはすらんと思案して、つ  
 がひたる矢をさしはづす、遠慮のほどこそ神妙なれ。すべて八郎

の矢に中る者、助る者ぞなかりける。されば、罪作りとや思はれけん、名告つて出づる者ならでは、左右なく射給はざりけり。長井の齋藤別當實盛、弟の三郎實員、片桐小八郎大夫景重、須藤瀧口以下、宗徒の兵攻入り攻入り戦ひければ、悪七別當手取與次、高間三郎同じき四郎吉田太郎以下、こゝを先途と防ぎけり。

御曹司須藤九郎を召して、敵は大勢なり。もし矢種盡きて打物にならば、一騎が百騎に向かふとも、つひには叶ふまじ。坂東武者の習ひ、大將軍の前にては、親死に子撃たるれども、顧みず、いやが上に死に重なつて戦ふとぞ聞く。いざさらば、大將に矢風負はせて引退けんと思ふはいかに。と宣へば、家季、然るべく候。但し、御誤り候はん。と申しければ、何でふさることあるべき。爲朝が手もとは覺ゆるものを。とて、例の大矢を打ちつがひ、堅めてひようと射

る。思ふ矢壺を誤らず、下野守の兜の星を射削りて、あまる矢が寶莊嚴院の門の方立に、籠中責めてぞ立つたりける。その時、義朝、手綱かい繰り、うち向かひ、汝は聞き及ぶにも似ず、無下に手こそ荒けれ。と宣へば、爲朝、兄にて渡らせ給ふ上、存ずる旨ありてかくは仕り候へども、誠に御許しを蒙らば、二の矢を仕らん。眞向、内兜は恐れも候。障子の板か、梅檀の弦走か、胸板の眞中か、草摺ならば、一の板とも二の板とも、矢壺を慥に承つて仕らん。とて、既に矢取つてつがはれけるところに、上野國の住人深巢七郎清國、つと驅寄せければ、爲朝、これを弓手に相受けて、はたと射る。清國が兜の三の板より筋違ひに、左の小耳の根へ、籠中ばかり射込んだれば、しばしもたまらず死ににけり。須藤九郎落合ひて、深巢が首をば取つてけり。



女子國文選(新制) 卷七

同じき十九日  
平治元年十二

光頼  
權中納言顯頼の  
長子。承安三年

歿、年五十。

信頼  
藤原忠隆の子。

後白河上皇に仕  
へて寵があつ

た。平治元年源

義朝等と兵を擧

げ、事敗れて捕

へられ、京都賀

茂河原に斬られ

た。年二十七。

(略系)

顯頼

女(忠隆室)信頼

光頼

惟方

(腹卷)



さるほどに、内裏には、同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、このほどは信頼卿の舉動過分なり。とて、不参にておはしましけるが、参内して承らん。とて、特にあざやかに東帯引繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹巻著せ、雑色の装束に出て立たせ、自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ。とて、御身近く置き、その外清げなる雑色四五人召し具して、大軍陣を張りて處々門々を固め守護しけるを事もせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓をひらめ矢をそばめて通し奉る。

一六 公卿僉議

(平治物語)

長方  
顯長の子。從二  
位中納言に至

紫宸殿の後ろを経て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上藤達みな下にぞ著かれたる。光頼卿、こは不思議の事かな。人はいかに振舞ふとも、彼は右衛門督、我は左衛門督なれば、下には著くまじきものを。と思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしけるに、今日の御座席こそ世にしどけなう見え候へ。と色代して、しづくくと歩み、信頼卿の上にむずと著き給ふ。光頼卿は信頼卿のためには母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、特に畏れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、著座の公卿、あなあさましと見給ふに、光頼卿下襲の尻ひき直し、衣紋繕ひ、笏とり直し、氣色して、今日は、衛府督が一座すると見えて候。召に参ぜざらん者をば、死罪に行はるべしとやらん承りて、参内するところなり。抑、何事の御



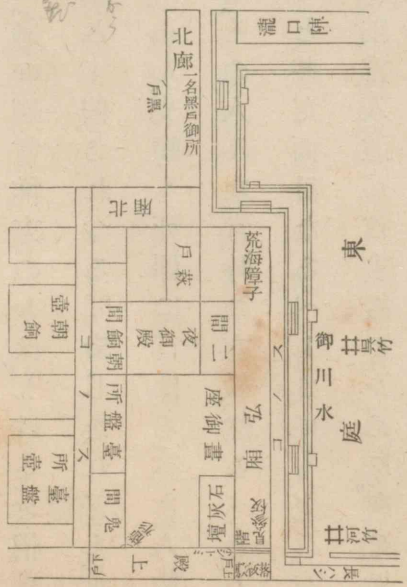
詫ぞ。と問はれけれども、信頼卿物も宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程経て、光頼卿つい立ちて、悪しう参つて候ひけり。とて、しづくくと歩み出でられけり。

庭上に充ち満ちたる兵ども、これを見奉りて、「あれ、この殿は大剛の人かな。さんぬる十日より、多くの

頼光  
多田満仲の子。  
驍勇にして射を  
善くした。治安  
元年歿。

頼信  
頼光の弟。兵法  
に達し、鎮守府  
將軍に拜せられ  
た。永承三年歿、  
年八十一。

人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人、一人もおはしまさざりつるに、仕出したることよ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれこの人を大將として合戦せば、いかばかりか頼もしからん。と申せば、傍なる者の「昔頼光、頼信とて、源氏の名將おはしましき。その頼光をうち返して、光頼と名告り給へば、これも剛にましますぞかし。」といへば、又傍より「などその頼信をうち返して、信頼と付き給ふ右衛門督殿は、あれほど臆病にはおはしますぞ。」といへば、「壁に耳、天に口といふことあり。恐ろし恐ろし。聞かじ。」といひな



惟方  
檢非違使別當藤原惟方。光頼の弟。

少納言入道  
藤原通憲のこ  
と。鳥羽・崇徳・  
近衛の三朝に歷  
仕し、正五位下  
日向守に任じ、  
入道して信西と  
いつた。

がら、みな忍び笑ひに笑ひけり。

光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小薨の前、見參の板高らかに踏み鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしけるを招き寄せて宣ひけるは、公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたることもなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人みな當時の有識、然るべき人どもなり。その内に入らんこと、甚だ面目なるべし。さても先日右衛門督が車の尻に乗りて、少納言入道が首實檢のために、神樂岡へ向かはれけることは如何に。以ての外、然るべからざる舉動かな。近衛大將、檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大

神樂岡  
京都市左京區。

勸修寺内大臣  
藤原高藤。良門の子。正三位内大臣に至る。  
三條右大臣  
高藤の子定方。  
從二位右大臣に至る。  
延喜の聖代  
醍醐天皇の御宇。  
英雄  
公卿の資格の  
一。攝家の次に  
上り、大臣家の  
上に位する。英  
雄家。  
大貳清盛  
平清盛。當時は  
太宰大貳。

いに恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならず。と宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかば、とて、赤面せられけり。

光頼卿重ねて、こは如何に勅詔なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君すでに十九代、臣また十一代、承り行ふことは、皆これ徳政なり。一度も悪事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、ひとへに有道の臣に伴なひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝほどの事はなかりしに御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はんこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなるが、和泉紀伊の國、伊賀、伊勢の家人待を受けて大勢にてあなる。信頼卿が語らふところの兵、若干ならじ。

主上  
二條天皇を申す。  
黒戸の御所  
清涼殿の北方にある殿舎。御賄所。  
上皇  
後白河上皇を申す。  
一本御書所  
内裏の殿舎の一。

平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。若し又火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎きなるべし。如何にいはんや、君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、この時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申しあはするとこそ聞ゆれ。相構へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。黒戸の御所に。上皇は。「一本御書所に。内侍所は。温明殿に。劍璽は何處に。夜のおとくに。」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。又、朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。と宣へば、「それには右衛門督住み候へば、その方さまの女房などぞ影ろひ候ふらん。」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今ほか

温明殿  
紫宸殿の東方にあたる御殿。

許由  
上代支那に於ける箕山の隠者。

くござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷し参らせたり。末代なれども、さすがに日月は未だ地に墮ち給はぬものを、天照大神正八幡宮は王法を如何に守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありといへども、わが朝には未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。とて、のろろしげに憚るところなく口説き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よに凄じげにて立たれたれども、且は悲しくて、我いかなる宿業によりて、かゝる世に生まれ會ひ、憂きことをのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を見聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。とて、上の衣の袖絞るばかりに泣かれけり。信頼卿の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみ、うち萎れてぞ出で給ひける。

中十文  
擬十文  
後倉以修り文

一七 おどろのした

(増 鏡)

増鏡十卷は、吉野朝の頃に公卿の誰かの手によつて書かれた歴史物語である。全體の趣向は、嵯峨の清涼寺に詣でた百餘歳の老尼が、菩提講に參會した人々に昔物語を聞かせるといふやうに仕組まれて、後鳥羽天皇の御即位から、後醍醐天皇の隱岐より還幸あらせられるまでの事蹟を記してある。文章は平安朝時代の優雅な和文を模した流麗な筆致である。

御門はじまり給ひてより八十二代に當りて、後鳥羽院と申すおはしましき。御諱は尊成タカヒツ、これは高倉院第四の御子、御母は七條院と申しき。治承四年七月十五日生まれさせ給ふ。文治元年三月二十五日、御年六つにて位に即かせ給ひけり。

七條院  
藤原殖子。修理大夫信隆の女。  
高倉天皇の妃。  
治承四年  
高倉天皇の御宇。

法皇  
後白河法皇。

御門いとおよずけてかしこくおはしませば、法皇もいみじううつくしとおぼさる。文治二年十二月一日、御書始させ給ふ。御年七つなり。建久元年正月三日、御年十一にて御元服し給ふ。おなじき三年三月十三日に、法皇崩れさせ給ひにし後は、御門ひとへに世を知ろしめして、四方の海波靜かに、吹く風も枝を鳴らさず、世治り民安くして、あまねき御うつくしびの浪秋津島の外まで流れ、繁き御恵み筑波山の陰よりも深し。よろづの道々に明らかくおはしませば、國に才ある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島の道なんすぐれさせ給ひける。御歌數知らず人の口にある中にも、

奥山のおどろのしたもふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

第一の皇子  
土御門天皇。

と侍るこそまつりごと大事と思されけるほど著く聞えて、いと  
いみじくやんごとなくは侍れ。

建久九年正月十一日、第一の御子四つになり給ふに、御位譲り  
申させ給ひており給ふ。御年十九位におはしますこと十三年な  
りき。今日明日二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事  
なれども、よろづところせき御ありさまよりは、なか／＼やすら  
かに、御幸など御心のまゝならんとにや。世を知ろしめすことは  
今もかはらねば、いとめてたし。

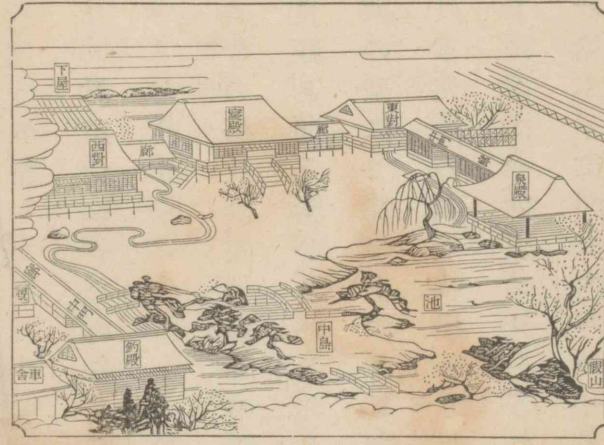
鳥羽殿  
今の京都市下京  
區上鳥羽の南に  
あたる地にあつ  
た離宮。  
白河殿  
同市左京區岡崎  
の邊にあつた離  
宮。

鳥羽殿、白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡り住まはせ給  
へど、猶また水無瀬といふ處に、えもいはずおもしろき院造りし  
て、しば／＼通ひおはしましつゝ、春秋の花紅葉につけても、御心  
ゆくかぎり世をひゞかして、遊びをのみぞし給ふ。處がらもはる

水無瀬  
大阪府三島郡島  
本村大字廣瀬。  
元久  
土御門天皇の御  
宇。

ばると川に臨める眺望、いと面白くなん。元久の頃、詩に歌を合は  
せられしにも、とりわきてこそは、

見わたせば山もとかすむ  
みなせ川ゆふべは秋とな  
に思ひけむ



寢殿造の圖

萱葺の廊渡殿など、はる／＼と  
の艶にかしうせさせ給へり。御前  
の山より瀧おとされたる石のた  
たずまひ、苔深き深山木に枝さし  
かはしたる庭の小松も、げに／＼

定家  
藤原俊成の子。  
新古今・新勅撰  
集の撰者。仁治  
二年歿、年八十。

千世をこめたる霞の洞なり、前栽つくろはせ給へる頃、人々あま  
た召して御遊などありける後、定家の中納言いまだ下臈なりけ

る時に奉られける。

老松

あり經けむ本の千年にふりもせてわが君ちぎるみねの  
わか松

君が世にせきいるゝ庭をゆく水の岩こす數は千代も見  
えけり

今の攝政は、院の御時の關白基通のおとど、その後は後京極殿  
良經と聞え給ひし、いと久しくおはしき。このおとどはいみじき  
歌の聖にて、院の上おなじ御心に和歌の道をぞ申し行はせ給ひ  
ける。文治の頃千載集ありしかど、院いまだきびはにおはしまし  
しかばにや、御製も見えざめるを、當帝位の御ほどに、また集めさ  
せ給ふ。土御門の内のおとどの二郎君、右衛門督通具といふ人を  
始にて、有家の三位、定家の中將、家隆、雅經などに宣はせて、昔より

院

後鳥羽上皇。

基通

藤原基實の子。

後京極殿

藤原兼實の子。

名は良經。

文治の頃

文治三年、藤原

俊成千載集を撰

す。

土御門の内のおと

ど

源通親。

有家

藤原重家の子。

家隆

歌人。新古今集

の撰者。嘉禎三

年没、年八十。

雅經

歌人。新古今集

の撰者。承久三

年没、年五十二。

俊房

村上天皇の皇子

具平親王の孫、

源俊房。

今までの歌をひろく集めらる。おのゝ奉れる歌を、院の御前に  
て自らみがきとゝのへさせ給ふさまいと珍らしく面白し。この  
時も、先に聞えつる攝政殿とりもちて行はせ給ふ。  
この撰集よりさきに、千五百番の歌合せさせ給ひしにも、すぐ  
れたる限りを撰ばせ給ひて、その道の聖たち判じけるに、やがて  
院も加らせ給ひながら、なほこの竝なみにはたち及び難しと卑下せ  
させ給ひて、判のことばをば記されず、御歌にて勝り劣れる志ば  
かりをあらはし給へり。なかゝいと艶に侍りけり。上のその道  
をえ給へれば、下も自ら時を知るならひにや、男も女も、この御代  
にあたりて、よき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮内卿の君といひ  
しは、村上の御門の御後に、俊房の左のおとどと聞えし人の御末  
なれば、はやうはあて人なれど、つかさ淺くて、うちつゞき四位ば

失せにし人  
源師光。

かりにて失せにし人の子なり。まだいと若きよはひにて、そこひもなく深き心ばへをのみよみしこそ、いと有り難く侍りけれ。この千五百番の歌合の時、院の上宣ふやう、こたみは皆世にゆりたる古き道のものどもなり。宮内卿はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなん、かまへてまろが面おこすばかりよき歌仕うまつれ。と仰せらるゝに、面うち赤めて涙ぐみて候ひけるけしき、限りなきすきのほどもあはれにぞ見えける。さてその御百首の歌、いづれもとりゝなる中に、

うすくこき野邊のみどりの若草に跡まで見ゆる雪のむらぎえ

草の緑の濃き薄き色にて、去年の古雪の遅く疾く消えけるほどをおし量りたる心ばへなど、まだしからん人は、いと思ひより難

くや。この人年積るまであらましかば、げにいかばかり目に見えぬ鬼神をも動かしたましに、若くて失せにし、いとほしくあたらしくなん。

かくてこの度撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二年三月二十六日、竟宴といふこと、春日殿にて行はせ給ふ。いみじき世のひびきなり。かの延喜の昔おぼしよそへられて、

院の御製、  
石の上ふるきを今にならべこし昔のあとをまたたづね  
つゝ

攝政殿

敷島ややまことばの海にして拾ひし玉はみがかれに  
けり

攝政  
藤原良經。

春日殿  
一條通の北にあつた。  
延喜の昔  
古今集の撰ばれたる時をいふ。



次々ずん流るめりしかど、さのみはうるさくてなん。

かくて、院の上は、ともすれば水無瀬殿にのみ渡らせ給ひて、琴  
笛の音につけ、花紅葉の折々にふれて、よろづの遊びわざをのみ  
盡くしつゝ、御心ゆくさまにて過させ給ふ。誠によろづ代もつき  
すまじき御世の榮え、次々今よりいと頼もしげにぞ見えさせ給  
ふ。

古今和歌集  
最初の勅撰和歌  
集。二十卷。

やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりけ  
る。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふこと  
を見る物聞く物につけていひ出せるなり。花になく鶯、水にすむ  
蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりけ  
る。力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれ  
と思はせ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。(古今和歌集序)

一八 高嶺の櫻

後鳥羽天皇

みよし野の高嶺のさくら散りにけり嵐も白き春のあけ  
ぼの

土御門天皇

しら雲を空なるものとおもひしはまだ山越えぬ都なり  
けり

藤原定家

春の夜の夢のうき橋とだえして峰にわかるゝよこ雲の  
空

藤原家隆

明けばまた越ゆべき山の峰なれや空ゆく月の末のしら  
雲

藤原良經

うちしめりあやめぞかをる時鳥啼くやさつきの雨のゆ  
ふぐれ

藤原雅經

うつり行く雲にあらしの聲すなり散るかまさ木のかつ  
らぎの山

藤原有家

花をのみ惜しみ慣れたるみよし野の梢に落つるありあ  
けの月

源 通具

藤原良經  
攝政太政大臣。  
建永元年歿、年  
三十八。

源 通具  
歌人。新古今集

の撰者。嘉祿三  
年歿、年五十八。

藤原秀能

歌人。延應二年  
歿、年五十七。

霜こほるそでにも影はのこりけり露よりなれしありあ  
けの月

藤原秀能

白波

僧 寂蓮

ゆふづくよ汐みち來らしなにはえの蘆の若葉を越ゆる

僧 慈圓

僧慈圓

歌僧。天台座主。  
嘉祿元年歿、年  
七十九。

暮れて行く春のみなどは知らねどもかすみに落つる宇  
治の柴舟

式子内親王

式子内親王  
後白河天皇の皇  
女。歌人。建仁  
元年歿。

山ふかみ春とも知らぬ松の戸にたえどかゝる雪のた  
ま水

宮内卿

名不詳。歌人。  
藤原師光の女。

宮内卿

柴の戸をさすや日かげのなごりなく春ぐれかゝる山の  
はの雲

俊成女

名不詳。歌人。  
藤原俊成の女。

俊成女

霜がればそことも見え草の原たれにとはまし秋のな  
ごりを

源實朝

征夷大將軍。歌  
人。建保六年歿、  
年二十八。

源實朝

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふたごころ我が  
あらめやも

一九 論孟抄

論語抄

子曰く、吾十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして  
惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心  
の欲するところに従ひて、矩を踰えず。

子曰く、朝に道を聞きて、夕に死すとも可なり。

子曰く、徳孤ならず、必ず隣あり。

子曰く、賢なるかな回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其

子

孔子のこと。名  
は丘。支那の魯  
國の人。周の敬  
王四十一年に歿  
した。年七十三。

回

孔子の弟子の顔  
回をいふ。

の憂に堪へず。回や其の樂みを改めず。賢なるかな回や。

子曰く、智者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむ。智者は動き、仁者は靜かなり。智者は樂しみ、仁者は壽し。

孟子抄

孟子曰く、天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず。三里の城、七里の郭、環りて之を攻むれども勝たず。それ環りて之を攻むれば、必ず天の時を得るもの有らん。然り、而して勝たざるものは、これ天の時は地の利に如かざるなり。城高からざるにあらざるなり。池深からざるにあらざるなり。兵革堅利ならざるにあらざるなり。米粟多からざるにあらざるなり。委てて之を去る

孟子  
名は軻。支那の  
周末の哲人。般  
王十三年に歿し  
た。

は、これ地の利は人の和に如かざるなり。故に曰く、民を域るに封疆の界を以てせず、國を固むるに山谿の險を以てせず、天下を威すに兵革の利を以てせずと。道を得るものは助多く、道を失ふものは助寡し。助寡きの至は親戚も之に畔き、助多きの至は天下も之に順ふ。天下の順ふところを以て親戚の畔くところを攻む。故に君子は戦はざるあり、戦へば必ず勝つ。

孟子曰く、下位に居て上に獲られざれば、民得て治むべからざるなり。上に獲らるゝに道有り。友に信ぜられざれば上に獲られず。友に信ぜらるゝに道有り。親に事へて悦ばれざれば友に信ぜられず。親に悦ばるゝに道有り。身に反りて誠ならざれば親に悦ばれず。身に誠なるに道有り。善に明らかならざれば其の身に誠

ならず。是の故に、誠は天の道なり。誠を思ふは人の道なり。至誠に  
して動かざるものは、未だこれ有らざるなり。誠ならずして未だ  
能く動かすものは有らざるなり。

孟子曰く、君子に三樂有り。而して天下に王たるは、與り存せず。  
父母俱に存し、兄弟故無きは、一の樂みなり。仰いで天に愧ぢず、俯  
して人に忤ぢざるは、二の樂みなり。天下の英才を得て、而して之  
を教育するは、三の樂みなり。君子に三樂有り。而して天下に王た  
るは、與り存せず。

子曰、賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回不改其樂。賢哉回也。

12日、試験中取り

得能文

文學博士。哲學者。富山縣の人。五井蘭洲儒者。大阪の人。寶曆十二年歿、年六十六。

二〇 學の話

得能文

昔、徳川時代の儒者に五井蘭洲といふ人があつた。この人の書  
いたものの中に、左の如きことが載つてゐる。

或人の戯語に、人あり、いふ、讀書學問はよきことなれど、一  
の疵あり。身持をよくせねばならぬことなり。これ疵なりと  
いふ。……又人あり、いふ、讀書學問はよきことなれど、一の疵  
あり。高慢になるが疵なり。……人又いふ、讀書學問はよきこ  
となれど、一の疵あり。貧乏になる、これ一の疵なりと。……

これは固より戯語に過ぎないのであらうけれど、當時の世間  
には、かやうな考へを持つてゐた者もあつたであらうし、又今日  
に於ても、世間には同じやうに考へてゐる者もあるであらう。我

我には一笑にだにも値せぬことのやうに思はれるが、併しながら、一體學問といふものはどんなものであるかといふことになれば、初めに思つたほど容易な事柄ではないであらう。世間で屢讀書と學問と同一視したり、物識りと學者とを混同したりするのは、一體「學」といふことの如何なるものであるかに就いて、明瞭判然たる考へが無いからであらう。

プラトーンがいつたやうに、人間の魂は常に本當のものを求めて止まない。幾度か蹉跌しながら、屈せず撓まず、本當のもの眞實なものを喘ぎ求めるのである。かくして眞實なものを欣求するのは、人間の衷情より發露するものであつて、何等か爲めにするが如きものとは、迥かに選を異にしてゐる。それ故に、眞に學にいそしむ心は、富貴功名によつて動かされる心とは別である。富

プラトーン

希臘の哲學者。

(前四二七—三  
四七年)

デュウイ  
米國現代の哲學  
者。コロンビヤ  
大學教授。

貴功名を輕蔑するといふのではないが、これを念頭に置かないのである。従つて貧乏もする。併しながら、眞に參學實究の人に取つては、貧乏も左程苦にはならない。それよりも、本當に欣求すべき價值があると思はれるものに向かつて、邁進して倦むことを知らないのである。學は學のために求むべきもので、決して何等かの爲めにすべきものではない。道德に就いても亦同じことがいはれる。道德は道德のためにすべきもので、決して他のもの手段になつてはならない。實踐主義者であるデュウイですらも、この事を痛論して、道德的行爲は、それ自らのために行ふべきであつて、他の目的のためであつてはならない。例へば、自分の修養のためと思つてもならない。」と説いてゐる。愛國者は、眞に愛國の熱情に驅られて愛國的行爲を爲すのであつて、これが自分の道

徳的修養のためだと思へば、その目的を誤る。その他の徳に於ても同様であつて、それが自己の修養になるなどと思へば、失敗に歸するといふのである。これは正しい考へであると思ふ。

學に在つてもその通りであつて、本當のもの、眞正なるものを擷みたいといふ、止むに止まれぬ衷心からの要求に驅られて爲されるものである。決して何等か他の目的のために用ひられる手段ではない。他の目的のために爲すのは學の應用であつて、學そのものではない。例へば、物理學を應用して器械を造るといふが如き場合は、初から利用を目標にしてゐるのである。併し、これは決して學そのものではない。學は自由なる精神の自發的行爲である。

既に學は、本當のものを擷まんとする自由なる精神の自發的

行爲であるが故に、學人と物識りとは異なつてゐる。物識りといふは博學多識の人であつて、自發的に進んで研究するといふよりも、寧ろ他人の研究したものを雜然と摺集するものである。物識りは知識の所有者である。これに反して、學人はどこまでも進んで欣求するものである。物識りの器具は記憶力である。學人の器具は思索力である。物識りは既成の知識を貯へるものである。學人は心を虚しうして知識を求めらるものである。兩者は、その態度に於て全く異なつてゐる。程伊川曰く、聞識多き者は、猶廣く藥物を儲ふるが如きなり。用ふる所を知るを貴しとなす。と。又曰く、學は博きを貴ばず、正しきを貴ぶのみ。と。

讀書そのものは學ではない。固より讀書は、先人の思想を知り、自己の趨向すべきところを知るために、必要缺くべからざるも

程伊川  
名は頤。支那の  
宋代の儒者。

のであるけれども、そのために、讀書を以て直ちに學と同一視することは出来ない。ましてや漫然として多讀するに於ては、精神の自發性を妨げ、思索を攪亂せしめる恐れがある。これ古來屢多讀が戒められた所以である。併しながら、選擇その宜しきを得て讀書に沈潛することは、學そのものの性質からして善いことであり、貴いことである。これ昔から讀書を貴び、やがて學と同一視されるやうにもなつた所以である。

學はそれ自ら目的であつて、他の目的の手段方便ではない。他のもの手段ならば、學の價值は他のものに依存することになるであらうが、それ自らが目的であるとすれば、それ自身に價值を有するのである。而してそれ自身に價值あるものは、眞に價值あるもの、最も價值あるものである。眞に價值あるもの、最も價值

呂叔簡  
名は坤。支那の  
明代の人。

あるものは尊嚴なものである。故にこの尊嚴なものに従事する學人は、やがて自ら持することも尊嚴ならざるを得ない。學人が、富貴も淫する能はず、威武も屈する能はざる底の氣概を具へるに至るのは、當然のことといはざるを得ない。けれども、この氣概は、一面には謙虚でなければならぬ。眞の學人は、常に眞理の前には謙虚である。これに反して、呂叔簡がいへるやうに、學進まずして、汲々焉として毀譽を恤へ、榮辱を憂ふ。といふが如きは、眞の學人ではない。

學とは、知識の體系である。而して經驗の範圍によつて知識の領域が分れるに従ひ、學は次第に分化して、それらの特殊科學となつてくる。かくて數學、物理學、化學、生物學等となつて分れてくるのである。特殊科學は此の如く種々に分れるが、併し孰れも



皆學である。學たることの性質を持つてゐるのである。この學たることは、經驗的事實ではなくして、觀念的である。理想である。この理想は特殊科學の指導原理である。而して學たることは、論理の當爲によつて基礎づけられる。即ち論理的當爲によつて學が成立つのである。如何なる學でも、苟も學といはれ得るかぎり、こゝにその根據を有してゐる。而して知識は無限の過程である。従つて學は又無限の過程でなければならぬ。學人は、この無限の過程に於て無限の努力を爲すのである。又爲すべきである。

(淺人零語)

大學者必ずしも天才にあらず。(西諺)

知識の尊ぶべきは、その量にあらずしてその質にあり。(西諺)

綱島梁川

名は榮一郎。倫理學者。岡山縣の人。明治四十年歿、年三十五。あれこれを「あれこれを集めて春は朧かな」芭蕉

二 秋の力

綱島梁川



川 梁 島 綱

あれこれをあつめて霞む春の朧を人生の夢とも見ば、秋は直ちにこれ覺醒なり、事實なり。蔦紅葉の中より露れ出づる節くれだちたる樹身、枯芝生の底より躍り出づる偃蹇たる雲根、いづれか秋は人に迫るの事實たらざる中にも、秋の力を最も強く瞻かにいひ出づるものは、黄柚なり、赤柿なり。一美術家語りていはく、

「われ曾て、ひねもす秋を郊外に探つて秋に會はず、歸路會、夕空鮮やかに結び出でたる赤柿の累々たるを見て、始めて秋こゝにありと叫びき。」と。げにも秋の姿をさながらに具象にして描き出

燕村

姓は谷口、又與

謝とも稱した。

俳人。攝津國の

人。天明三年歿、

年六十七。

抱一

名は酒井忠因。

畫家。文政十一

年歿、年六十八。

せるものありとせば、そは碧落の空に躍如として結び出でたる赤柿を措きては、又あらじ。秋は實に個々の累々の赤柿にその全幅の表現を得たる趣あるにあらずや。その昔、燕村抱一などいふ畫家が、寥々たるこの一物に大膽なる落想をこめて、一幅の秋の心を勁く、隈なく、淋漓揮灑し出せる詩眼、流石に凡にはあらざりけり。

見よ、秋の潭に淵黙の智あり、秋の空に剛明の象あり。月は清輝を帯び、星に聲あり。落葉に埋もるゝ枯井の水、なほ鬢眉を鑑すべく、夢を歌ふ満園の蟲しぐれ、人の深省をいざなふ。空際ははやかに走る波濤の山、極目鮮やかにくねる一河の帶、樹間の聲の錚々として勁き、天籟地籟の澎湃として厲しき、あはれ秋の萬象、何物かすべてこれ空明、照徹、剛克、雄健の一氣を以て貫かざる、何物か

すべて哲人の雄姿、道士の風岸を以て人に迫らざる。

秋は夢に非ずして事實なり。人は秋に立つて、直ちに事實と面相接するなり。秋は何等の天文、地采の形式を藉らざる、裸體のままなる思想なり。そは如々たり、故に明瑩なり、澄徹なり。而してまた充實なり、豐贍なり。春草の紗、夏木の衣、すべて名殘なく脱ぎすて、あらはなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くもまた雄々しき丈夫神の面影は、げに秋にこそふさはしけれ。もし秋に一味の文采ありとせば、白籟紅蓼の裳裾、蘆花淺水の情、桔梗、荳蔻、尾花が波の、袂も輕き姿なるべし。

あはれ、その澹如たる清しさは、かの哲人道士の婆娑たる一衣の高風に似たるかな。至竟、秋の力は、その衣にあらずして、赤裸々の事實にあり、思想にあり。(病問錄)

姉崎正治  
哲學者。文學博  
士。京都の人。  
東京帝國大學名  
譽教授。

### 二三 宗教の生活と感化 姉崎正治

人間は普通に生活してゐる間は、必ずしも生命の融通を覺えずに濟むが、どんな國民も、如何なる人も、凡ての事情が圓滿で、所謂極樂世界で過すことの出来るものではない。或は天然の怖ろしき威力に接し、或は人事の不幸に接するのは、人間の生活に避くべからざることである。その場合には、人は必ず自身の生命について考へ始め、終には、自身の身體や生命は自分だけでなく、天地人類と共通であることを悟るやうになる。この自覺が即ち宗教である。宗教の程度や種類によつて、自身以上の大いなる生命を色々に觀察して、種々なる神を出來し、或はその一部分を各、一つづつの神としてこれに祈り、或は凡てこれ等を一括して唯一

の神と信ずるやうになる。またその神の種類によつて、それに対する人間の態度、即ち信仰や儀式などに種々の異同を生ずる。

これ等の事實は、茲には略しておくが、要するに、宗教の信仰とは、力に限りのある個人が、自分の生命を孤立の事柄とせずして、それよりもなほ以上に大なる生命と密接の關係があることを悟つて、この自身以上の生命に己を委託することである。勿論委託するといつても、その動機や目的、又は程度やその委託の工合は、宗教の種類によつて非常に異なつてゐる。併し、自分を自分以上の生命、自分の生命に密接の關係ある生命に依類するといふ點に至つては、何れの宗教も同一である。

所謂浮世の子で、唯現在に満足して、五十年の一生を醉生夢死に過し、何等の動搖も不満も感じない人があるならば、その人は、

健康な人が心臓の動悸を感じないと同じく、また平和な空氣の中にある間は、自分が空氣の中にあることを感じないと同じく、自身の生命の根元を思はず、即ち宗教の信仰が無くともそれで済むのである。けれども、實際如何なる人も、何かの場合には、自身が空氣の中に住んでゐることを悟ると同じく、人間は自分の生命が自分だけのものでないことを悟つて、自身の生命の根元を尋ね求め、その恩徳を知り、またそれに依頼するやうになる。日本の諺に、「苦しい時の神頼み」といふことをいふが、苦しい時は勿論、苦しくない時でも、この大生命を自覺する人は、自身の生命を豊富にする人であつて、宗教が人生の歸着を與へる。といふのは、即ち自身の生命の根元を捉へさせる力があるからである。

古來、宗教は色々あるが、世界の人心に大なる影響を與へたの

セム民族  
ヘブライ人・アラビヤ人及び  
ジャ南西部・アフリカ北部の民族。

は、佛教とキリスト教とである。佛教は印度から起つて、所謂印度歐羅巴人種の宗教心に基づいて、その信仰が深められた。而して支那・日本に傳はるに及んで、支那の道德思想と日本の國民思想とを吸収して、その感化は殆ど亞細亞全體に行き渡つて、今日では東亞を中心として西洋にも感化を及ぼしつゝある。キリスト教はセム民族の宗教心から出でて、その信仰が世界に及び、ギリシヤの哲學思想、ローマの法律思想と合體して、先づ歐羅巴全體を感化し、それから全世界に擴つた。故にこの二宗教は、元は共に亞細亞から出たものであるが、大別していへば、佛教は東洋の宗教であり、キリスト教は西洋の宗教であるといふことが出来る。この二宗教は、前に述べた宗教の根本、即ち自分以上の生命の自覺を、二つの方面から築き上げて、いはば陰陽の兩面となつてゐる。

る。而もその二つが兩極から出發しながら、反對の方面に背馳せず、歸着する所は一となつてゐることは、著しい事實である。

佛教の發足點は、所謂諸行無常といふことにある。即ち萬事萬物一として變化のないものはない、生まれて來たものは必ず死ぬ、出來上がったものは何時か碎ける、吾々人間の生命も亦生老病死の道行であつて、世上の事物は一として不變であるものはないといふのが、佛教の出發點である。かう觀察すれば、天地はただ夢幻の變化の如くであつて、人間は死ぬために生まれて來たものといはねばならぬ。佛陀の精神は、この無常生死に驚いて、このやうな表面の變化のみが人生で、それ以上に何物もあるものではないのかといふ問題から、發心の絲口を開いたのである。

この悲しいやうな驚きの心から、段々に人生の歸着を求めて

見れば、生死變化無常夢幻は、つまり人々が各、自分だけを標準として世界を觀るから起るのである。人が死んでこれを悲しむのは、その人が死んだきりで無くなるものだと思つてゐるからである。親愛なものに別れて悲しむのは、別れてゐても、なほ一の生命の中にあるといふことを知らないためであらう。憎いものに、出遇つて恨み怒るのは、その人を敵として、自分とその人とは、共に同一生命の仲間であるといふことを思はないからであらう。して見れば、人生の無常に驚き、變化を悲しむのは、つまり自分を自分だけの生命として觀て、一個人の生死以外になほ一層大きく永き不滅の生命があつて、自分はたゞその一面・一片だといふことを思はないからである。即ちこれ等の悲喜哀樂の心の働きは、我を小さく觀る我執から生ずるものである。この我執を打破

すれば、そこに我以上の生命に接することが出来る。恰も細き管を以て天を望み、天を小さいと思つたものも、管を棄てて見れば、天空は限りなく大きいと同様である。人間は我執を一つ取除けば、自分だけとして固くなつてをらず、自分の生命は天地と共に生きてゐるのであるといふ見開きがつく。そこに無常を超越した常住があり、悲みや喜びを打過ぎた大安樂がある。この常住・安樂の状態は、これを口でいひ現すことは出来ない。人々が自ら修養して、その味ひを自得する外はないのである。

要するに、佛教の根本の教は、かやうにして天地・人生の無常に驚いて、心を轉じて無常以上の大生命に接するといふ點にある。その教を應用し實行するために、或は智慧を研き、道德を修め、靜坐入定するなど、色々の方法がある。またその修業の種類によつ

て、佛教に色々の宗派が生じた。それ等のことは佛教史の話になるから、茲には省いておくが、兎も角、佛教は消極の方から宗教の信仰に入つて、その目的を達したのである。而してその教の據り處、または指導者、或はその眞理の標準保證として、佛教徒の信仰は、何れの宗派でも、開祖または佛陀の人格に歸着するのである。佛教の信仰から見れば、佛陀は單にこの教を説いただけではなく、その人の一生が悲喜哀樂を超絶し、無常・生死を打破つた事實の證明になつてゐる。自分の説く通りに行ひ、行つた通りに教へて、その人格はその教の事實となつて現れたものである。佛教の信仰でいへば、法即ち眞理が、現實に人となつて現れたのが佛陀である。故に佛陀といふのは、眞理を悟り得た人といふ意味である。またその人を如來といふのは、如實の眞理、即ち大生命が人と

なつて現れて来て、吾々に同様の大生命を與へてくれるといふ意味である。佛教の感化は、その豫備の發心としては、無常の悲觀から起り、進んで一切生靈の共通融會に對する信仰となつて、その信仰を功德回向の實行に現すにある。而してその信と行との中心標準の實證としては、如來を信ずるにある。これ等の信と行とが人心を感化した事實は、支那や日本の歴史に非常に大なる影響を與へてゐる。

キリストの信仰は、佛陀と正反對に、初から天地、人生には慈悲圓滿の天父があるといふ直覺的の信仰から出てゐる。この信仰を本として見れば、人間は僅か五尺の身體、五十年の生命とはいへ、その姿は神の姿を現し、その心には天父の靈が乗り移つてゐる。世界には悪人もあれば、怖ろしきものもあるが、それ等は天父

の力と愛情とに對しては、日光を遮る浮雲にも劣つてゐる。また大風の前の塵にも及ばぬのである。

キリストはこの信仰で、萬事萬物皆天父の力を現し、神の光榮を示すものと見て、谷間の百合の花一つにでも、大王の威嚴に優る光榮を認め、隨つて、自身は格別深くこの天父の愛情のもとに生きてゐるといふことを經驗し、何物の力もこの信仰を破壊し、またはこれを奪ひ去ることは出來ないと確信して、惡魔の誘惑を斥け、自身の死を怖れず、萬事を天父の愛情に委託して一生を貫いた。

キリストは捕へらるゝ前夜、神に祈つて、凡て天父の御心の如くならせ給へ。といつた。また十字架の上で、最期の言葉として、神よ、我が靈を爾にあづく。といつたのも、皆神の大生命、大慈悲に己

谷間の百合云々  
「野の百合花は如何にしてそだつかを思へ。勞せず紡がざるなり。われ爾曹に告げん。ソロモンの榮華の極みの時だにも、その装ひこの花の一にしわざりき。」(新約全書 馬太傳)

を委託した信仰の結果である。人間の生命は全く天父から賜はつたもので、吾々は天地萬物と共に、皆この神の子であつて、互に同胞であるといふのが、キリストの信仰の中心になつてゐる。自分の生命は即ち神の賜で、神と我とは父子一體である。キリストのこの信仰に導かれて、同じ信仰に入るものは、またキリストと同様に、同一の父を父として、永遠の大生命に與ることが出来るのである。

そこでこの信仰を事實に現せば、第一に同胞博愛の實行となり、第二に信仰を同じくして靈の生命を一にする者の共同團結、即ち教會の生活となるのである。キリスト教が今日まで社會に及ぼした感化は、愛情の實行と、教會の團結との二であり、而してその信仰の標準實證となるものは、キリストの人物であつた。キ

リストといふ人物の一生涯は、天父の愛情がその子の一人に事實となつて現れ、信仰の力が十字架上の死と、靈の復活とで證明されたのである。それ故に、キリスト教の信仰では、キリストは神であつて、また人である。即ち人間には違ひないが、人間のまゝで、而も神の力を實際に現した人である。神の實力を人間の一生に事實として證明した人である。キリストとは神の人、或は聖人といふ意味であつて、神の愛と力とに接して、又これを自分の身に現した人である。故にキリスト教の教は、萬物の天父があるといふのであつて、その信仰はキリストを神なる人と信ずるにある。この教と信仰とは、ギリシヤの哲學思想によつて綿密な組立が出来て、その上にローマの法律思想に基づいて教會の組織を造り上げ、思想と實行とが相伴なつて西洋の人心を感化して、その



文化を造り上げたのである。

佛教とキリスト教とは、このやうな反對の方向から出發したが、その歸着する所は、孰れも宗教の中心である大生命の信仰といふことにある。而してその信仰の實證を、各、その教祖である佛陀やキリストの人物に求めて、その人は眞理の顯現、神の力の顯現であると信ずる點に於ては、同一點に達してゐる。信仰の理想とする所は、各、その教祖の人格を理想として、その人を信じ、その人に近づくといふことにある。佛教では、この理想を凡ての人間の成佛としていひ現し、キリスト教では、天父の全きが如く自らを全うし、キリストと異體同心となるを理想とする。

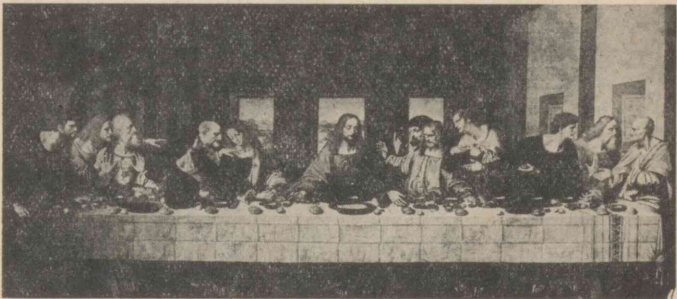
このやうに、佛教とキリスト教とは、歸着は一であるが、その出發點が、消極と積極と、陰と陽との兩面相對してゐるから、その感

化に於て、東洋と西洋と著しき區別が現れてゐる。一口にこの區別をいへば、東洋の宗教は、先づ個人の小我を排斥するといふこととにその特徴があつて、西洋のは、天父の大靈に接するにある。その結果、東洋の思想は、個人の人格を棄ててかゝる方面が發達したに反し、西洋の思想は、個人の人格を神に引上げるといふ方面が著しく發達した。故に佛教の方は、己の小なることを悟るによつて永遠の生命を得ようとし、キリスト教の方は、神の生命の大なることを信じて、それで己を不滅にしようとする。

この對照は、東洋と西洋との文明に著しく現れて、文學美術道德法律政治などに各、その特徴が現れてゐる。それ等の特徴を極めて簡單なる例でいつて見れば、佛像は、鎌倉の大佛の如く、靜かに眼を閉ぢて自己といふ考へを無くした寂滅の姿であるが、こ

ギド・レニー  
伊太利の畫家。  
(一五七五—  
六四二年)  
ラファエル  
伊太利の畫家。  
(一四八三—  
五二〇年)

聖餐式  
基督教で、基督  
が磔刑に處せら  
れた前夜、その  
弟子に麵包と葡  
萄酒とを分與し  
た記念に、教會  
堂で隨時に行ふ  
儀式。麵包を聖  
肉、葡萄酒を聖  
血と稱して食事  
をする。



(筆チンヱ・ダ・ドルナオレ) 餐晩の後最

れに反して、キリストの像は、ギド・レニーの「荆冠のキリスト」の如く、眼を開いて天を仰ぎ、或はラファエルの「シスチナ像」の如く、喜悅の眼を開いて威風を四方に示してゐる。なほ一つの例をいへば、佛教の精神は茶の湯の如くに、音もなく、聲もなく、一碗の銘茶を啜る間に現れてをり、キリスト教の精神は、天上から下つて來る天樂とも聞える音楽の中に、聖餐式の葡萄酒を飲むのがその趣になつてゐる。

(光あれ)

現	代	方丈記	新開紙	西一二〇四
高 山 樗牛 (一八六四)	若 山 牧水 (二五八八)	樗牛全集	言文一致	西一二〇四 ラテン帝國建設
尾 崎 紅葉 (二五六三)	德 富 健次郎 (二五八七)	紅葉全集	二五四九 憲法發布	
落 合 直文 (二五六三)	芥 川 龍之介 (二五八七)	落合直文集	二五五四 日清戦役	
綱 島 梁川 (二五六七)	沼 波 瓊音 (二五八七)	梁川全集	二五六四 日露戦役	
長 谷 川 二葉亭 (二五六九)	芳 賀 矢一 (二五八七)	獨歩全集	歐洲大陸文學輸入	
藤 岡 作太郎 (二五七〇)	島 木 赤彦 (二五八六)	二葉亭全集	二五七〇 韓國併合	
石 川 啄木 (二五七二)	内 藤 鳴雪 (二五八六)	啄木全集	二五七二 明治天皇崩御、大正天皇踐祚	
夏 目 漱石 (二五七六)	大 町 桂月 (二五八五)	漱石全集	二五八六 大正天皇崩御、今上天皇踐祚	
森 鷗外 (二五八二)	森 鷗外全集	鷗外全集		
大 町 桂月 (二五八五)	島 木 赤彦全集	桂月全集		
内 藤 鳴雪 (二五八六)	芥 川 龍之介全集	島木赤彦全集		
芳 賀 矢一 (二五八七)	蘆 花全集			
沼 波 瓊音 (二五八七)				
芥 川 龍之介 (二五八七)				
德 富 健次郎 (二五八七)				
若 山 牧水 (二五八八)				

近

山崎 龍雄 (二四八五)

猿蓑 茶

新開紙

西一九二一 華盛頓會議

肉 葡萄酒を聖  
血と稱して食事  
をする。

# 文學年表

時代區分	作家	作品	參考事項	外國事蹟	
上	柿本人麻呂(?) 大伴旅人(二三九一) 山上憶良(二三九三) 山部赤人(?) 大伴家持(一四四五)	〔祝詞〕 〔壽詞〕 〔宣命〕 古事記 日本書紀 風土記 萬葉集 懷風藻	漢學傳來 佛教渡來 聖德太子の憲法 大寶律令 推古時代の美術 一三七〇 奈良奠都 國分寺の建立 遣唐使、留學生 天平時代の美術	釋迦死す(前四八五?) 希臘の文化 孔子生る(前五五三) 羅馬の文化 基督生る(前四)	
古	在原業平(一五五三) 菅原道真(一五六三) 凡河内躬恒(一五六七) 紀貫之(一六〇六) 壬生忠岑(一六二五) 紫式部(?) 清少納言(?) 藤原公任(一七〇一) 和泉式部(?)	〔神樂歌〕 〔催馬樂〕 竹取物語 伊勢物語 古今和歌集 土佐日記 落窪物語 宇津保物語 源氏物語 紫式部日記 枕草子 和漢朗詠集 今昔物語 榮華物語 大鏡	一四五四 平安奠都 天台宗眞言宗傳來 片假名平假名 一五五四 遣唐使廢止 一五六一 菅原道眞左遷 一六〇〇 將門の亂 一六八七 藤原道長薨 前九年の役 後三年の役 一八一六 保元の亂 一八一九 平治の亂 一八四一 平清盛薨 一八四五 平氏滅亡	唐の文學 (柳宗元、韓退之、白樂天等) 西八〇〇 チャールス大帝羅馬帝の金冠を受く 西九〇七 唐滅ぶ 西九六〇 宋興る 宋の文學 (歐陽修、司馬光、蘇東坡等) 西九六二 オットー大帝神聖羅馬皇帝となる	
中	西行法師(一八五〇)	山家集	一八五二 賴朝征夷大將軍に任ぜらる 一八八一 承久の亂 貞永式目 浄土宗 日蓮宗 禪宗 一九三四 元寇	西一二〇四 ラテン帝國建設 西一二二五 英國大憲章發布 ダンテ死す(一二二一) 西一三六八 元滅び明興る 西一三九二 李成桂朝鮮國を	
近	藤原俊成(一八六四) 鴨長明(一八七六) 源實朝(一八七九) 藤原定家(一九〇一) 阿佛尼(一九四三) 吉田兼好(二〇一〇) 北畠親房(二〇一四)	方丈記 新古今和歌集・金槐集 保元物語・平治物語 平家物語・源平盛衰記 古今著聞集・十訓抄 宇治拾遺物語 十六夜日記 増鏡 徒然草			

(光あれ)

近古

藤原定家(一九〇一) 阿佛尼(一九四三) 吉田兼好(二〇一〇) 北島親房(二〇一四) 飯尾宗祇(二一六一) 山崎宗鑑(二二一三)

古今著聞集・十訓抄 宇治拾遺物語 十六夜日記 增鏡 徒然草 神皇正統記 太平記 曾我物語・義經記 新葉和歌集 [謠曲狂言] [御伽草紙] [連歌俳諧]

海土宗 日蓮宗 禪宗 一九三三 元寇 一九九四 建武中興 一九九五 足利尊氏の亂 應仁の亂 東山時代の美術

ダンテ死す(一二二一) 西一三六八 元滅び明興る 西一三九二 李成桂朝鮮國を建つ 西一四五三 東羅馬帝國滅亡 西一四九二 コロンブス亞米利加發見 西一五一七 ルーテルの宗教改革

近世

西山宗因(二三四二) 井原西鶴(二三五三) 松尾芭蕉(二三五四) 榎本其角(二三六七) 近松門左衛門(二三八四) 新井白石(二三八五) 竹田出雲(二四一六) 賀茂真淵(二四二九) 谷口蕪村(二四四三) 横井也村(二四四三) 柄井川柳(二四五〇) 本居宣長(二四六一) 加藤千蔭(二四六八) 上田秋成(二四六九) 村田春海(二四七一) 式亭三馬(二四八二) 蜀山人(二四八三) 小林茶人(二四八七) 石川雅望(二四九〇) 良寛和尚(二四九一) 十返舎一九(二四九一) 香川景樹(二五〇三) 瀧澤馬琴(二五〇八)

七部集 [近松時代物世話物] 冠辭考 鶉衣 柳樽 古事記傳 雨月物語 浮世風呂 東海道中膝栗毛 南總里見八犬傳

二二六三 家康征夷大將軍に任ぜらる 儒學振興 古書出版 二二九八 切支丹宗の禁 漢學(程朱學、陽明學、古學、古文辭學) 國學(契沖、四大人) 俳諧(貞門、談林、蕉風、天明調) 二五一一 米使ヘルリ渡來 二五二〇 櫻田門外の變

シエイクスピヤ死す(一六一六) セルヴァンテス死す(一六一六) 西一六三六 滿洲國號を大清と改む 西一六六一 明滅亡 モリエール死す(一六七三) ミルトン死す(一六七四) ニュートン死す(一七二七) 西一七八三 北米合衆國獨立 レシング死す(一七八一) 西一七八九 佛蘭西大革命 カント死す(一八〇四) 西一八〇四 ナポレオン皇帝となる ゲーテ死す(一八三二) バルザック死す(一八五〇) 西一八五四 クリミヤ戰役

現代

大隈言道(二五二八) 橘垣蓮月(二五三三) 太田阿彌(二五五三) 古河一葉(二五五六) 樋口規子(二五六二) 正岡子規(二五六二) 高山樗牛(二五六二) 尾崎紅葉(二五六三) 落合直文(二五六三) 綱島梁川(二五六七) 國木獨步(二五六八) 長谷川二葉亭(二五六九) 藤岡作太郎(二五七〇) 石川啄木(二五七二) 夏目漱石(二五七六) 森鷗外(二五八二) 大町桂月(二五八五) 内藤鳴雪(二五八六) 島木赤彦(二五八六) 芳賀矢一(二五八七) 沼波瓊音(二五八七) 芥川龍之介(二五八七) 徳富健次郎(二五八七) 若山牧水(二五八八)

默阿彌全集 一葉全集 子規全集 樗牛全集 紅葉全集 落合直文集 梁川全集 獨步全集 二葉亭全集 啄木全集 漱石全集 鷗外全集 桂月全集 島木赤彦全集 芥川龍之介全集 蘆花全集

二五二七 明治天皇踐祚、王政復古 二五二九 東京奠都 二五三二 學制頒布 二五三七 西南の役 活版術 新聞紙 言文一致 二五四九 憲法發布 二五五四 日清戰役 二五六四 日露戰役 歐洲大陸文學輸入 二五七〇 韓國併合 二五七二 明治天皇崩御、大正天皇踐祚 二五八六 大正天皇崩御、今上天皇踐祚

西一八六九 スエズ運河開通 西一八七一 ヘルサイユ和議 アンデルセン死す(一八七五) ツルゲニエフ死す(一八八三) 西一八九七 朝鮮國號を韓と改む イブセン死す(一九〇六) トルストイ死す(一九一〇) 西一九二二 滿朝滅び、支那共和國となる 西一九一四 世界大戦起る 西一九一九 パリ講和會議 西一九二二 華盛頓會議





untry  
to tell you that  
back to America.  
"to her? If not  
I guess other  
home too. I don't  
how I wish Miss  
I don't like